

翻刻と紹介 「小笠原長生日記 昭和八年」

飯島直樹

解説

本稿は、東郷平八郎の側近として知られる海軍中将子爵小笠原長生（みかどなり）（一八六七〜一九五八年）が昭和八（一九三三）年に記した「小笠原長生日記」（以下、「日記」と表記）を紹介するものである。幕末期に老中を務めた唐津藩の小笠原長行の長男として生まれた彼は海軍軍人として艦隊勤務や軍令部参謀を長く務め、大正期には東宮御学問所幹事として、総裁の東郷平八郎らとともに皇太子時代の昭和天皇の教育を担当した⁽¹⁾。海軍時代の大きな功績として、『明治二十七年海戦史』、『明治三十七八年海戦史』、『征清海戦史』、『征露海戦史』といった日清・日露戦争の海戦史編纂を主導したことが挙げられ、文筆家としての一面も兼ね備えていた。かかる経歴を有する小笠原であるが、彼が海軍を退いた後の昭和期の動向も注目される。特にロンドン海軍軍縮条約問題において海軍内の艦隊派とともに東郷の意を受けて反対運動を展開するといった活動が知られている。また、海軍時代から親密な関係にあり、忠君愛国の亀鑑として尊敬していた東郷のスポークスマ

ンとして、大正から昭和期にかけて東郷に関する著作や宣伝活動を精力的に展開し、「聖将」東郷平八郎のイメージ拡大にも大きく貢献した⁽³⁾。

こうした小笠原の多彩な活動に着目して研究してきたのが田中宏巳氏である。田中氏は「日記」を発見し、「海軍の神様」と呼ばれる東郷が最晩年に海軍内で隠然たる影響力を及ぼして、艦隊派を後押ししていたことを実証的に研究してきた⁽⁴⁾。また、最近では、宮内庁が編集した『昭和天皇実録』（東京書籍から順次刊行中）にも東宮御学問所時代を中心として「日記」が典拠史料として使用されていることが確認できる⁽⁵⁾。

このように、小笠原の活動は多岐にわたっており、その一端は田中氏によって明らかにされてきた。ただし、田中氏の諸研究は「日記」を初めて活用して小笠原やその周辺の動向を実証した一方で、小笠原の影響力を過大評価する傾向にあるという近年の指摘も見られる⁽⁶⁾。こうした指摘は、研究当時の史料状況の限界と、「日記」自体が現在に

至るまで個人所蔵で非公開であるという状況に起因するところが大きいと思われる。このことは、他の研究者が利用することが少ないために、従来の研究の評価だけでは、図らずも小笠原らの動向に対して偏った評価がなされかねないことを意味する。⁽⁷⁾昭和期における東郷や小笠原らの考えや影響を正確に理解するためには、彼らの動向の全体像を提示することが重要になるだろう。そのためにも昭和期の「日記」が重要な手掛りになるといえる。

筆者が「日記」にたどり着いた経緯を説明しておく、二〇一五年度近代政治史演習において、「昭和天皇実録」を扱った際に、東宮御学問所幹事であった小笠原の「日記」が典拠史料になっていたため、筆者が個人的に現在の所蔵先に問い合わせ「日記」原本を閲覧させていただいたことが端緒であった。その後、「日記」の有用性に鑑みて、今後史料紹介という形で一部を紹介することを願ひ出て、所蔵先を明示しないという条件でお許しいただいた。そのため、本稿では所蔵先を明示することは避けるが、本稿の翻刻は「日記」原文を筆者が複製したものに依拠している。

次に「日記」の概要について説明しておきたい。既に田中氏が概説しているが、より詳細に言う、筆者が所蔵先で確認した「日記」は、計二三冊存在している。具体的には、明治三六〜三七年、三八〜三九年、四三年、四四年、四五（大正元）年、大正二年、四年、六年、七年、八年、九年、一一年、一二年、一三年、一四年、一五（昭和元）年、昭和二年、三年、四年、六年、七年、八年、一〇年の日記がある。⁽⁹⁾一部を除き全て博文館出版の当用日記が用いられ、全て鉛筆書きとなっている。筆者が閲覧した際には、全ての日記が年度ごとに宮内庁の封筒に入った状態で保管されていた。これはおそらく宮内庁が「昭

和天皇実録」編纂過程で「日記」を調査した際に梱包したものだと思われる。

昭和期の「日記」については、前述のように田中氏が研究で多用しているが、昭和七年を中心とした分析になっているため、昭和八年の「日記」は昭和六、七年のそれと比べ使用頻度が落ちる。しかし、昭和八年「日記」を紐解けば、東郷や政界関係を中心として、小笠原が関係を持つ人物や団体との交流が記されており、その有用性は前後の時期の「日記」と比べても何ら遜色ないと思われる。そこで、今回は昭和八年の「日記」に絞り翻刻、紹介することにした。

本「日記」の一番の魅力は、小笠原の交際範囲の広さであろう。「日記」に登場する名前を見ると、海軍関係の人脈だけにとどまらず、政党や議会関係、華族、仏教関係にいたるまで実に幅広い。小笠原の多岐にわたる活動は、こうした人脈によるところが大きいことに改めて気づかされる。以下では、小笠原の人脈をもとに昭和八年における小笠原とその周辺の状況を見ておきたい。

昭和八年は、海軍内では軍令部条例改正や「大角人事」と呼ばれるような条約派將官追放人事が行われるなど、東郷と軍令部長であった伏見宮博恭王という海軍の二大権威を背景に、現役に加藤寛治らを始めとする艦隊派が勢力を広げていた時期にあたる。海軍に対する活動は田中氏らが詳細に論じているので、ここでは海軍外での活動の一端を見てみたい。

小笠原は政党関係や貴族院関係をはじめとして、政界方面での交流は極めて幅広かったことがわかる。特に注目されるのが、政友会との接触である。鈴木は小笠原らを介して東郷との面会を希望しており（二月二日）、二月二五日に両者の会談が実現した。その後も小笠原

らはたびたび鈴木をはじめ政友会の面々と会合を持っている（三月七日、八月二〇日、十一月一七日）。このように、小笠原らは海軍だけでなく、政界方面にも精力的に接触していた。こうした活動を行う目的の一つは、「政党政派ヲ超越シテ国家ノ為メ赤裸々ニナリテ平沼驥一郎男ト提携シ、一面軍部ト結び以テ真ノ強力内閣ヲ組織シテ、来ルベキ国家ノ重大時機ニ備フルコト」と鈴木に話しているように（十一月一七日）、平沼を中心とした内閣の実現にあったようである。この時期の艦隊派による平沼内閣運動は手嶋氏が分析しているが、小笠原だけでなく東郷も平沼もしくは荒木貞夫陸相を首班とする内閣を希望している（十一月一日）ように、彼らの中で平沼を主軸とした「真ノ強力内閣」を志向されていたことがより鮮明にわかる。

平沼との関連でいえば、トルコ関係の記述も目を引く。小笠原の下にはクルバンガリーなる人物が頻繁に訪れている（一月五日、二月一日、二八日、四月一八日、十一月一日）。彼はロシア出身で、ロシア革命後に日本に亡命、在京ムスリムを率いて東京回教団を結成し、日本政府や陸海軍関係者と接触しながらムスリムによる反ソ活動を展開した人物であり、その人脈は陸海軍の将官や犬養毅ら政界関係、頭山満など多岐にわたっていた。小笠原はクルバンガリーと一九三二年ごろから度々面会していた¹²。そして、「日記」中で注目されるのは、平沼や実川とともに旧オスマン帝国の皇族「アブトルカリム」の来日を後押ししていたことである。この「アブトルカリム」とは、オスマン帝国のアブデュルハミト二世の孫にあたるアブデュルケリム・エフエンディのことである。アブデュルケリムの来日については、既に小笠原の関与を指摘する研究も存在するが、小笠原らは彼の来日に備え資金援助などを平沼や実川と相談していたようである。さらに、クル

バンガリーは同じくロシア出身のトルコ系ムスリムで、この年に日本に来日したアブデュルレシト・イブラヒムを紹介している（十一月一日）¹⁴。イブラヒムは「新疆ニ於ケル回教徒ノ独立運動」の真相を小笠原に語り助力を乞うなど、日本における彼らの活動の一端を垣間見ることがができる。当時彼らに注目してイスラーム政策を展開する陸海軍当局と同様に、小笠原も平沼や実川らとともに「回教徒」活用を視野に彼らを支援しており、日本におけるムスリムの活動とそれを支援しようとする日本側の動きを見ることが出来る。

以上のように、小笠原は多様な人脈をもち、諸方面で活動を行っていた。ただ、そうした行動の背景には、この当時諸方面から重臣的な役割を期待されていた東郷平八郎の存在が常にあったことを忘れてはならない。この時期、東郷の影響力が広範囲に及ぶようになると、前述のように東郷と従来から親しく、交際範囲も広がった小笠原は、いづしか東郷の意向を代弁する立場になっていた。このことが、前述のような海軍や政界における彼の行動を規定していたといえる。そのため、政変関係で東郷への要望が集中することを予想していた小笠原は、高齢の東郷の意向を慎重に取り扱おうとしていたことが見受けられる（八月二六日、十一月一日など）。その東郷に対しては、皇族であり軍令部長（この年に軍令部総長と改称）の伏見宮も配慮しており、たびたび重要事項について小笠原を介して東郷と意見交換を行っている（二月一七日、九月二二日）。また、昭和九年度予算編成で海軍省と大蔵省間の協議が難航し、伏見宮が軍令部総長を辞職しようとする、東郷が落涙しつつ諫言し、伏見宮も思いとどまるといったやりとり（二月二二日、二月一日、二日）も興味深い。小笠原は海軍の二大権威の間に立って、その関係をつなぐ役割を果たしていたといえる。

しかし、そのことは東郷という存在があつて初めて、小笠原やその周辺が様々な活動を展開できることを意味していた。この時期、艦隊派は「大角人事」により条約派将官追放人事を敢行していたが、この肅清人事について伏見宮は消極的であり、結果的には伏見宮の艦隊派に対する信用喪失につながっていくことになる⁽¹⁶⁾。

そうした小笠原らにとつて、米寿を迎える東郷の健康問題はやはり切実なものであつた。この時期既に臥床することが多かつた東郷であるが、年末には「喉頭癌」の診断が下り、余命も「時間ノ問題」という状態に陥つていた。大晦日に東郷の病状を聞いた小笠原は「嗚呼、天ナルカ、命ナルカ、出来得ルナラバ⁽¹⁷⁾仮シ病床ニアラル、トモ、切メテ一年間程ハ存命セラレンコトヲ神カケテ祈ラザルヲ得ズ」と記して、この年の「日記」を終える。この記述からは、東郷を尊敬するが故に、東郷の意向を実現するべく全力を尽くしてきた小笠原の焦燥感が反映されているように思われる。

以上では、政治的な活動を行う小笠原の側面を追つてきた。こうした活動以外にも、著作、講演活動を始め様々な社会活動を行っている。揮毫を乞われる記事が散見されることから分かるように、小笠原は書道家としても有名であり、泰道書道院での活動も行なっている。また、東宮學問所幹事時代に当時皇太子であつた昭和天皇に「法華経」を伝献しているように、仏教に深く帰依する小笠原は、各寺院への寄進も多く、宗教関係者との接触も頻繁であつた。同じく日蓮教徒の北一輝をはじめとして、高村光雲といった文化人との交流も盛んに行つていた。こうした宗教的なつながりも小笠原の豊富な人脈の要因であつたといえる。歌舞伎界の初代中村吉右衛門との交流も頻繁であり、吉右衛門に演技上の助言を与える記事（八月三十一日、一〇月七日な

ど）からは、小笠原の文化人として一面も垣間見ることができるといえる。

華族としての小笠原という側面では、貴族院関係者や華族との交流の他に、華族会館での活動も散見される。小笠原は華族会館の理事で大正期から長く務めており、この時期には徳川家達館長に代理を依頼されるほどであつた（八月九日）。実際に徳川館長不在の際には、評議会や各種式典を小笠原が館長代理として施行している（六月一日、一〇月七日など）。また、かつて御用掛を務めていた学習院でも「赤化防止」を研究するための特別委員に任じられている（五月二十四日）。大正期には周囲から度々学習院長就任を要請されていたこともあり、小笠原が華族会館、学習院における活動を精力的にこなし、周囲から相当の信頼があつたことがわかる。こうした活動からは、従来言及されてきた政治的側面とはまた異なる、華族としての新たな一側面も照射することができるだろう。以上のように、小笠原の活動は多岐にわたつており、豊富な話題をあわせ持つ「日記」は政治史的側面にとどまらない幅広い分野の研究でも役立つように思われる。

〔付記〕「小笠原長生日記」は現在の所蔵先を明かさないと条件の下で翻刻の御了承をいただいた。そのため、所蔵先を明示することはできないが、関係者各位には心より御礼申し上げる。なお、本稿の翻刻と紹介に関する一切の事柄は全て筆者の責任に帰することを付記しておく。

註

(1) 小笠原の経歴を補足すると、海軍兵学校卒（一四期）、日清戦争時は「高千穂」分隊長、日露戦争時は軍令部参謀を務めた。そ

の後、各艦長を経て軍令部勤務を長く務め、一九一四年より東宮御学問所幹事に就任、皇太子時代の昭和天皇の教育を担当した。一九一八年海軍中将任官、一九二一年退役。その後は宮中顧問官を務めた。海軍時代の一九一一年には学習院長であった乃木希典に請われて学習院御用掛に就任し一九一五年まで務めた（以上の経歴は、市川銃造『子爵小笠原長生』（小笠原長生子爵喜寿記念編纂会、一九四三年）参照）。

(2) この点については、田中宏巳「日清、日露海戦史の編纂と小笠原長生（一）」（『軍事史学』一八一三、一九八二年）、同「日清、日露海戦史の編纂と小笠原長生（二）」（『軍事史学』一八一四、一九八三年）、同「日清、日露海戦史の編纂と小笠原長生（三）」（『防衛大学校紀要人文・社会科学編』第四七編、一九八三年）に詳しい。

(3) 田中宏巳「忠君愛国的「日露戦争」の伝承と軍国主義の形成」（『国史学』一二六、一九八五年）、同『東郷平八郎』（吉川弘文館、二〇一三年、初出はちくま新書、一九九九年）補論、山田朗「近代日本軍勢力の研究」（校倉書房、二〇一五年）、第二部第一章参照。

(4) 田中宏巳「昭和七年前後における東郷グループの活動（一）」、「昭和七年前後における東郷グループの活動（二）」、「昭和七年前後における東郷グループの活動（三）」（それぞれ『防衛大学校紀要人文科学分冊』第五一編（一九八五年）、第五二編（一九八六年）、第五三編（一九八六年））。

(5) 東宮御学問所が設置された一九一三年から一九二一年に閉鎖されるまでの間、断続的に「日記」が典拠史料となっている。

(6) 手嶋泰伸「平沼騏一郎内閣運動と海軍」（『史学雑誌』一二二―九、二七頁）。

(7) ただし、田中氏が所蔵する「日記」を利用したものとして、田久元『戦間期の日本海軍と統帥権』（吉川弘文館、二〇一六年）が確認できる。

(8) 田中宏巳「小笠原長生」（伊藤隆・季武嘉也編『近現代日本人物史料情報辞典』（吉川弘文館、二〇〇四年）、一〇一―一〇二頁）。

(9) ロンドン海軍軍縮条約が締結された昭和五年や昭和十一年以降の「日記」は現存していない。田中氏によれば終戦直後に小笠原自身が焼却したという（前掲田中「昭和七年前後における東郷グループの活動（一）」）。

(10) 前掲手嶋論文参照。

(11) 正式名はムハンマド・ガブデュルハイ・クルバンガリー（一九二〇―一九七二年）。帝政ロシアの裕福層に生まれ、ロシア革命期には全ロシア・ムスリム大会に参加し、早くから政治活動を行っていた。反ボリシェビキのコレチャクを支持していたが、赤軍に敗れると満州、次いで日本に亡命した（以上の説明は、松長昭「東京回教団長クルバンガリーの追放とイスラーム政策の展開」（坂本勉編『日中戦争とイスラーム―満蒙・アジア地域における統治・懐柔政策』、慶應義塾大学出版会、二〇〇八年）一八二頁参照）。

(12) 「日記」をさかのぼると、一九二八年九月三〇日条に交友のあった満川亀太郎から「本邦ニアル回々教ノ代表人物露人クルバン氏ノ為メ一臂ノ力ヲ添ヘンコトヲ乞ハレ、且近日伴ヒ来ル旨ヲ

告ゲラル。諾ス」とあるのが初出である。この後すぐに面会した様子は無いものの、一九三二年ごろから、クルバンガリーと交流が始まったようである。

- (13) 田中宏巳「アブドゥル・カリム擁立運動と新疆ムスリムの動向」(神田信夫先生古稀記念論集編集委員会編『清朝と東アジア』(山川出版社、一九九二年)、一三七―二五二頁)、メルトハン・デュンダル「オスマン皇族アブデュルケリムの来日」(前掲『日中戦争とイスラーム』、一三五―一七七頁)。田中氏は「日記」の一部を引用してムスリム側の動向と小笠原の関与を指摘する。デュンダル氏も田中氏の論文をもとに小笠原の存在を指摘している。なお、「日記」中には「皇太子」と記されているが、それは誤りである。

- (14) イブラヒムについては、坂本勉「アブデュルレシト・イブラヒムの再来日と蒙疆政権下のイスラーム政策」(前掲『日中戦争とイスラーム』、八二頁)参照。

- (15) ロンドン海軍軍縮条約問題以降、東郷が海軍だけでなく陸軍にも影響力を及ぼしていたことは、前掲田中諸論文、前掲同『東郷平八郎』参照。特に後者では、東郷が実質的に陸海軍の「元老」的存在であったことを指摘する。陸海軍内だけでなく、平沼騏一郎も軍の統制ができる重臣的な役割を東郷に期待していた(前掲手嶋論文、八頁など)。

- (16) 前掲手嶋論文、一五―二二頁参照。

- (17) 宮内庁編『昭和天皇実録 第三』(東京書籍、二〇一五年)、一九二〇年二月二三日条。「法華経」は北一輝が中国から持ち帰ったものを満川亀太郎に依頼して小笠原に伝えたものであった

(「日記」一九二〇年二月二五日条)。なお、小笠原は大正期から北一輝と旧知の間柄であった。

「小笠原長生日記 昭和八年」

〔凡例〕

本「日記」の翻刻に際しては、基本的に原文に忠実に従うように努めたが、読みやすさを考慮して、以下のような方針を設定した。

一句読点は適宜補足した。また、旧字は固有名詞や小笠原が慣用的に多用する表現（「満洲」、「互」など）を除き、適宜新字に改めた。

一人名や一部の固有名詞に関する補註は、判明した分だけ初出時に（ ）で追加した。軍人の場合は現職などの情報も加えた。

「日記」は基本的に片仮名表記であるが、一部平仮名表記の箇所も見られる。その場合も修正は施さずに、原文のまま翻刻し固有名詞以外は「ママ」あるいは「平仮名ママ」の補注を施した。本文の改行は一部を除き基本的に原文に従っている。

誤記は基本的に原文のままとして、適宜「ママ」のルビ（人名の誤記の場合は可能な範囲で正字）を補った。その他、明らかな誤りなどは本文中に（ ）で注記した。

判読不能文字は、□で表記した。また、「日記」中には、忘却などの理由と思われる人名や地名部分の空白が多くみられるため、本文中の空白箇所を「空白」と注記した。

一部新聞記事の切り抜きや資料の貼り付けがなされている。新聞記事については、出典が明らかなものはその出典を明記した。ただし、出典が明らかでない記事の場合は原則として記事内容を翻刻した。

ごく一部、小笠原家に関する私的な事柄、個人の評価に関わる箇

所については〔省略〕〔前略〕〔中略〕〔後略〕といった形で削除した。

一月一日 日曜 快晴

最好天気ニテ頗ル暖気ナリ。

少々風邪ノ気味ニテ引籠ル。

例年ノ如ク家族ト共ニ祝膳ニ着ク。

午后三時房子来リ初材料調査、午后七時半辞去。好材料持参、目出タク祝納ム。

一月二日 月曜 晴

午后一時千坂（智次郎、海軍後備役）中将来訪。秀子（長生夫人、前橋藩知事松平直方の娘）ト共ニ二時間余ニ互リ種々談話ヲ交フ。（後略）

一月三日 火曜

昨夜ノ初夢ニハ昨年喜寿ニ達シタル今泉定介氏ニ寿（イ）の大字ヲ示シタル処ヲ見ル。気持好シ。終日執筆。

一月四日 水曜 晴

午前十一時服部太元師来訪。宏子ニ木彫ノ雀ヲ、予ニ（高村）光雲氏筆ノ色紙ヲ贈ラル。

一月五日 木曜 曇雨

午前十時クルバンガリー氏来訪。満洲ニ於ケル状況ヲ告ゲラル。

一月六日 金曜 雪雨

午前八時二十分重要人物ヲ訪問シ、夫レヨリ午後六時二十分迄要件ニ従事ス。帰途藤里氏ト新宿駅マデ自動車ニ同乗、同所ニテ袂別。

一月七日 土曜 晴

午後一時半ヨリ七時迄房子材料調査。

一月八日 日曜 晴

午前十一時電気クラブニ至リ泰東書道院新年会ニ列ス。

午後一時四十分東郷〔平八郎〕元帥ヲ訪フ。種々要談ヲナス。其ノ際元帥ノ談話要領左ノ如シ。

○昨日宮中デ山本〔権兵衛〕ニ会フタラ、山海関事件ノコトヲアンナコトヲスルカラ困ルト恰モ此方カラシカケタヤウニ云フカラ、先方カラ仕カケタノデ警備隊トシテハ任務上、自衛上、応戦スルノガ当然デヤナイカト云フテヤツタ。

○昨日藤田〔尚徳、海軍〕次官ガ来テ岡田〔啓介〕ノ辞職ノコトヲ報告スルカラ後任ハ誰カ良イカト訊ネテ見タラ、大角〔零生〕ト云フカラ、ソレナラコツチノ考ト同ジダト云フテオイタ。併シ財部〔彪〕ノ一味ガヤハリ盲動シテ居ルヤウヂヤカラ油断ハナランゾ。

尚何時頃発展スベキヤノ質問アリシ故、明日頃ナルベシト申シ辞去シタルニ、本日夕刻総理大臣〔斎藤実〕、元帥ヲ訪問、後任大角大將ト決定。

一月九日 月曜 晴

午前九時半千坂中将、南郷〔次郎、海軍予備役〕少将来訪。大角大將大臣就任ノ経緯ヲ話シ、三人連名ニテ祝辞ヲ送ル。昼食ヲ共ニス。

午前十時桜井〔忠温、陸軍予備役〕少将来訪。之ニ故秋山〔真之、海軍〕中将伝ノ元帥ノ題字ヲ交付ス〔直ニ辞去〕。

午後三時半浅岡信夫氏来訪。米国滞在中ノ情况ヲ告ゲラレ色紙二十二枚ニ揮毫、即座ニ揮毫ス。四時辞去。

午後七時ヨリ九時迄園田〔実、海軍大学校教頭、海軍〕少將、真崎〔勝次、横須賀鎮守府付、海軍〕大佐来訪。

海軍大臣就任ノ経緯ヲ訊カル。大要ヲ話シ猶其ノ希望ノ点ヲ聴ク。本日ヨリ愈々「辱知諸賢 手紙物語」起稿。

一月十日 火曜 晴

午前十時実川時次郎氏来訪。左ノ点ヲ延べラル。

一、財部ニ面会シタル所、同大將ハ平沼〔騏一郎〕ニ面会ヲ希望セラレ、ヲ以テ之ヲ取計ラヒ先日面会シタルガ、這ハ山本大將ノ意見ナルベキコト〔財部大將ハ実川氏ニ向ヒ平沼男ハ宮中廓清ノ決心アリヤ、総理ヲ引受クル決心アリヤ等訊ネシ由ナリ〕

一、連盟ハ決局脱退セザル可ラザルベク、其ノ際元老重臣会談ヲ開カレ、要アルベシ

一、米国ハ日本ニ向ヒ愈々先ヅ經濟戰ヲ開始スベク思ハル等ニテ同氏ハ一時間半ニテ辞去。

午後七時半ヨリ三十分間「癸酉歳ノ所感」ノ題ニテ放送。評判ヨク即夜電報ニテ謝意ヲ表シ来ルモノアリタリ。

一月十一日 水曜 雨曇

午前九時千坂中将来訪。

午後三時ヨリ九時迄房子材料調査。

秀子、宏子ハ午後五時ヨリ新歌舞伎座見物、十一時帰宅。

一月十二日 木曜 晴

午前十時半井上〔清純〕男ノ紹介ニテ〔空白〕氏来ル。東郷元帥ニ政黨政治反対ニ賛成ヲ求ム。予ハ取次不承知ノ旨ヲ答フ。

同時中村吉右エ門氏来訪。「手紙物語」中ニ同氏ヲモ加フベキ旨ヲ語ル。大ニ喜ブ。十一時半辞去。

午後一時ヨリ九段偕行社ニ至リ愛国婦人会新年会ニ列ス。総裁宮妃〔閑院宮載仁親王妃智恵子〕殿下、梨元宮妃〔守正王妃伊都子〕殿下ヲ始メ奉り会スルモノ二百余名。同三十分本庄〔繁、陸軍〕中将ノ講話アリ、了ツテ宴ニ移ル。一昨夜ノ予ノ講演ニ関シ妃殿下ヨリ御言葉アリ。其他諸夫人ヨリ挨拶ヲ受ク。三時半帰宅。

本日好天気ニテ非常ニ暖ク恰モ三月末頃ノ氣候ナリシ。

一月十三日 金曜 曇

午前九時山本英之侑氏来訪。其ノ請ニヨリ村伯床次氏ニ紹介ス。

同十時中川〔繁丑、海軍退役〕少将、故島村〔速雄〕元帥伝ニ関シ来訪。又東郷元帥ノ題字ヲ乞ハル。承諾。

同十一時日々新聞社ノ正木氏来訪。一時間余要談。

午後一時富士記者来訪。〔清水〕次郎長ト初対面ノ情況ヲ訊ク。

同三時薩摩〔雄次〕氏来訪。一時間要談。

一月十四日 土曜

千坂中将来訪。

乃木神社ニ参拜。有志諸士ト式典ヲ挙、「乃木將軍凱旋記念会」ヲ挙グ。〔けふ 乃木將軍 追慕の集ひ〕の記事貼付

今から廿八年前乃木將軍が帝都に凱旋した一月十四日、非常時日本で將軍を追慕する当時の將軍の幕僚や縁故の深い人達が十四日午前十一時から旧乃木邸で「將軍追慕の集ひ」を開いた、世話役は当時副官の一人であつた服部真彦中将で、黒井大將をはじめ河西、貴志、小笠原、渡辺、今西、堀内、白井の各中将、隈部少将、石井学習院教授、親戚の菊池、能瀬両氏、將軍令弟の息玉木陸軍中佐、香坂東京府知事など約七十余名が、集まつて乃木神社杉谷社司が祭主となつて式典をあげ、つゞいて午後一時旧乃木邸の応接間、食堂で凱旋当日そのまゝの料理の勝栗、スルメ、のし昆布、たらのすの物などを食膳にのせ濁酒を汲み交はして往時を追想し將軍の遺徳を語り合つた【写真〔略〕は社前に集まつた将星】

一月十五日 日曜 晴

午後一時百九歳ノ鳥巢越山師、高村光雲氏、服部太雲氏ト共ニ（孝長、宏子、基之同道）、三越長寿展覽会ヲ見物シ記念ノ写真ヲ取り二時散会。夫レヨリ東郷元帥ヲ訪、時局ニ関シ報告シ、又日々より依頼ノ国民歌ニ関スル元帥ノ賛辞ノ許可ヲ得。其ノ節元帥八十日夜二於ケル予ノ放送ヲ大ニ賞讃セラル。

一月十六日 月曜 晴

重要事結果良好。

夜、深里氏ト參宮橋マテ同行。停車場ニテ別ル。

一月十七日 火曜 雨雪

午前九時千坂中将來訪。

同十一時尾上設藏氏來訪。本年中ノ予算ニ付協議。昼食ヲ共ニシ一時辭去。

正午藤堂武子〔長生長女、子爵藤堂高寛夫人〕來訪。夕刻マデ遊ビ帰ル。

夜、石川〔信吾〕軍令部參謀、賀□、大西〔敬二〕艦隊參謀來訪。海軍ノ將來ニ付意見ヲ闢シ二時間ニシテ辭去。

一月十八日 水曜 晴曇

午前血寫住ノ安川ハル女史、徳丸泰久氏外一名ト共ニ來訪。寫謹奉納ニ付謝意ヲ表セラル。

同時ニ大船大觀音ノ花田半助氏及〔空白〕氏來訪。
午后一時半ヨリ七時迄房子材料調査。

一月十九日 木曜 曇

午前九時千坂中将來訪。

同十一時飯田町ノ神宮奉齋會ニ至リ昭和維新會ニ列ス。會スルモノ頭山〔滿〕、今泉ノ諸翁ヲ始メ、二十余名ノ猛者連集合、意見ヲ闢ス。

午后三時帰宅。

四時池田子夫人及小林氏來訪。

九條〔道美〕公薨去。

一月二十日 金曜 曇

午前九時千坂中将來訪。

同十時大倉〔喜七郎〕男ノ紹介ニテ飯塚茂氏來訪。
暹羅ノ革命ニ付、今ガ皇國ヨリ一本釘ヲサシ置クベキ好時機ナリト熱心ニ説カル。

午后一時大宮御所ニ御機嫌伺ニ伺候。次イデ九條家ニ至リ弔意ヲ表ス。

同二時海軍大臣官舎ニ至リ大臣、千坂、南郷諸氏ト會シ、海軍ノ將來ニ付意見ヲ開陳シ三時過辭去。三越ニテ買物ヲナシ夕刻帰宅。

〔中略〕
改造二月号ニ掲載セラレタル「小笠原明山」ヲ讀ム。面白シ。

一月二十一日 土曜 曇雪

午前九時千坂中将來訪。

午后二時ヨリ八時十五分迄房子材料調査。
秀子、宏子、東劇見物。
夜ニ入り降雪アリ。

一月二十二日 日曜 雪

積雪数寸。

午前九時千坂中将來訪。

同十一時崎山〔武夫〕氏來訪。鈴木〔喜三郎〕政友會總裁、東郷元帥ニ敬意ヲ表スル為メ訪問シタキ旨ヲ告ゲラル。元帥ニ都合ヲ尋ヌベキヲ答フ。

午后一時花田氏ト同道、米野女史ヲ訪ヒ法華經及觀世音ニ付談話シ、

三時半帰宅。

五時四十五分秀子及三児女ヲ伴ヒ水交社ニ至リ、晚餐ヲ共ニシ八時半
帰宅。

一月二十三日 月曜 曇

午前十時兒玉吞象氏外一名来訪。亡父ノ逸事ニ付意見ヲ訊ネラル。
午后三時森代議士来訪。政略ノ将来ニ付意見交換。近々若手代議士数
名ヲ同道スベキヲ約サル。

一月二十四日 火曜 晴曇

午前九時千坂中将来訪。

同三十分三須〔精一〕男爵外二名来訪。防空協会ニ付協議セララル。

午后二時ヨリ七時迄房子材料調査。種々案ヲ持參ス。

一月二十五日 水曜 曇

午前九時千坂中将来訪。同十時警視庁高等科〔空白〕氏外一名来訪。

〔中略〕午后一時秀子ト共ニ泰要寺ニ至リ故〔松平〕直方殿ノ法要ニ
列ス。

同三時〔華族〕会館理事会ニ列シ四時半帰宅。

一月二十六日 木曜

午前九時千坂中将来訪。

同十時「茶と花」遠藤敏夫氏来訪。予ノ談話ヲ訊ク。

同十一時幕府海軍研究家文倉平次郎氏来訪。□□ノ事ヲ訊ネラル。

午后五時半東京会館ニ至リ近衛〔文麿〕公以下ノ登赴ナル大亜細亞協
会創立懇談会ノ招待ニ応シ出席。満洲代表鮑觀澄氏、広田〔弘毅〕ロ

シヤ大使等二次イデ、明治天皇ノ明治十四年ハワイ王ニ賜リタル御親
翰ニ付激励的謹話ヲナシ大ニ感動ヲ覚ヘ、其ノ結果村川〔堅固〕博士
ノ発言ニヨリ一同起立、明治天皇ノ御英靈ニ対シ奉リ黙禱ヲナス。
午后九時半帰宅。

〔大亜細亞協会創立懇談会〕の記事貼付

近衛文麿公、村川堅固博士、広田弘毅大使、松井石根中将、菊地武夫
男外十数氏の発起にかゝる大亜細亞協会創立懇談会は廿六日午後六時
より丸の内東京会館において開会、陸海軍はじめ各方面の代表者六十
名出席、村川博士より協会創立の趣意を説明し満洲国代表鮑觀澄氏そ
の他諸名士より協会創立を祝福する旨の挨拶あり九時盛會裡に散會し
た

同協会は亞細亞民族の連合結成により世界の亞細亞に対する誤れる観
念を是正するを目的として創立されたもので亞細亞諸国の文化、政治、
経済、社会諸事情を調査攻究すると共に亞細亞諸国間の親和増進を期
せんとするものである

なほ正式発会式は四月三日神武天皇祭を期して行はれるはず

一月二十七日 金曜 晴

午前九時千坂中将来訪。

午后二時ヨリ七時マデ房子材料調査。

一月二十八日 土曜 晴

午前七時四十分外出。重要人物ヲ訪問、夫レヨリ種々奔走。夜七時半
マデ藤作氏ト同道、八時帰宅。

本日寒氣頗ル厳ク零下五度半ニ下ル。

一月二十九日 日曜 晴

午前九時千坂中将来訪。山本英之補氏(マ)同行。

一昨朝ヨリ唐津〔空白〕女塞行ニテ一週間予ノ為メニ武運長久ヲ祈リ呉ル。

午后三時三浦〔義次、子爵〕家ニ佐々木八十八〔佐々木清隆（隆一）の父、佐々木営業部創業者〕氏ヲ訪ヒ、夫レヨリ藤堂家ニ至リ晚餐ヲ饗セラレ九時帰宅。

一月三十日 月曜 晴

午前九時千坂中将来訪。

同十分服部太元師来訪。

午后二時ヨリ七時マデ房子材料調査。

一月三十一日 火曜 晴

午前九時鳥巢〔玉樹、海軍予備役〕中将来訪。東郷元帥ニ揮毫依頼ノ件ヲ話サル。

同十時キング記者来リ格言ニ付請ハル。

午后四時半東郷元帥、伊東ヨリ帰京ニ付同五時往訪。

政友会総裁鈴木喜三郎氏、敬意ヲ表スル為メ予ト同道、訪問シタキ旨ヲ告ゲ承諾ヲ得。尚ホ大亜細亞協会ノ件、暹羅革命ノ件、連盟ノ情況、政変来ルベキ予測等ヲ告ゲ、又或ハ重臣ノ御前会議開カルベキヲ報告ス。元帥曰ク縦ヘドンナ事ガアツテモ満洲事件ハ一歩モ譲ルベカラズ、巴ヲ得ズンバ連盟脱退モ可ナルベク、御前会議ヲ開カル、トスルモ开(マ)ハ満洲事件不動ノ前提ニ於イナサルベキナリ云々。

午后六時宮田氏ノ招ニ応シ晚翠軒ニ至リ、千坂、南郷、井上、伊江

〔朝助〕、崎山諸氏ト共ニ主トシテ連盟ニ付意見ヲ交換シ七時半帰宅。

二月一日 木曜 晴

午前九時千坂中将来訪。

午后三時北一輝氏来訪。平沼男、宇垣〔一成、朝鮮総督、陸軍〕大將ト結ベルヤノ疑ヒアル旨ヲ告ゲラル。同四時加藤〔寛治、軍事参議官、海軍〕大将来訪。五時過マデ海軍将来ニ付意見ヲ交換ス。

二月二日 金曜 晴

午前十時宮中顧問官参内定日ニ付参内、拜謁被仰付、十一時過帰宅。数葉ノ揮毫ヲナス。

午后一時半ヨリ七時迄房子材料調査。

二月三日 金曜 晴

午前九時千坂、同十時南郷少将来訪。大角海軍大臣ニ注意ヲ与フベキ件ヲ議シ、今夕南郷少將、大臣訪問ニ決定。昼食ヲ共ニス。

午后二時大円寺ニ至リ豆撒式ニ列ス。導師ハ百九歳ノ鳥巢越山師、歳男ハ高村光雲氏ニテ盛大ニ挙行。予モ光雲氏ト共ニ豆ヲ撒ク。

クジ引トナリ予ハ加藤〔空白〕雲氏作ノ大黒天ヲ引アツ、縁起善シ。四時頃、宏子来リ、続イテ武子モ来ル。鳥巢師、高村氏ト共ニ撮影。予ハ別ニ三木〔空白、宗〕策氏ヨリ彫刻セル白橙大黒天ヲ贈ラル。又岡葉登喜子ヨリ見事ナル菓子ヲ貰フ。同女ハ予ノ寄進スル千手観音様ノ台座ニ経文千卷ヲ手写シ納ムル人ナリ。

夜例年ノ如ク孝長、基之豆ヲ撒ク。

二月四日 土曜

昨夜夢ニ明治天皇ニ拝謁シ小笠原ヘトシタル御書ヲ拝戴シタルヲ見ル。
午前九時千坂中将、続イテ南郷少将、井上清純男来訪。

南郷少将ヨリ昨夜大角海相ニ面会、二時間半ニ互リ昨日日本邸ニテ協議セル件々ヲ忠告シ、且近日荒木陸相ト会見、懇談シテ充分協力一致シ其ノ力ニテ次期ノ首相ヲ決定セラレヨ、然ラバ我等同志ハ必ず他ノ首相候補ヲ排斥スベキ旨ヲ言ヒシニ、海相ハ必ず実行スベキヲ言ヒ、其ノ節ハ南郷少将ニモ立合呉レトトノ答ナリシ旨ヲ告ゲラル。又井上男ハ○国大使ノ本国ニ打電セル暗号電報ノ要旨ヲ持参セラレシガ、其ノ慧眼驚クベキモノアリタリ。三氏ト昼食ヲ共ニシ、予ハ戦役護国塔役員会ニ出席。一旦帰宅ノ後午后六時、放送局ノ招待ニ応シ万安ニ至リ新発的ノ拡声機ノ試験ヲ見ル。会スルモノ松田源治、山崎讓一、中野正剛等政客十数名、予ハ総代トナリテ一場ノ挨拶ヲナシ九時半帰宅。

二月五日 日曜 晴

午前八時佐々木清隆〔長生の三女慶子の夫〕氏出京、来訪。十時迄快談ス。

八時半服部太元師モ来訪、同席。秀子始メテ服部師ト懇談ス。

十時清隆氏ハ三浦家ヘ赴キ、服部師ハ十一時半辞去。

午后二時ヨリ七時過マデ房子材料調査。

二月六日 月曜 晴

正午八田〔嘉明〕満鉄副総裁ノ招キニ応シ錦水ニ至ル。

千坂中将、池田〔長康カ〕男同席。満洲ノ将来ニ付意見ヲ交換シ、又クルバンガリー及山本英之輔氏ノ後援ヲ八田氏ニ協ル。快諾ヲ得。午

后二時散会。

二月七日 火曜 晴

午前、三須男、櫛笥〔隆督〕子、中川日支師外数名交モ来訪。

午后二時愛国婦人会ニ至リ奥村〔五百子〕女史ニ就キ一場ノ講演ヲナス〔本日ハ女史ノ二十七回忌命日ナリ。講演ハ三時ニ了ル〕。

同三時十分東郷元帥邸ヲ訪ヒ若夫人ニ面会シ病状ヲ訊ク。漸次快方ニ赴カル。悦ブベシ。

同四時会館評議会ニ列シ五時半帰宅。

二月八日 水曜 晴

午前揮毫。

午后二時ヨリ七時迄房〔子〕材料調査。

二月九日 木曜

午前七時外出。重要人物訪問。終日奔走。

夜參宮橋ヨリ乗車、帰宅。

二月十日 金曜 晴

午前来客多シ。

午前十一時半、帝国ホテルニ至リ東久邇宮殿下ヲ御歓迎申上ゲ長生御案内及御接待申上グ。

二時帰宅。

夜クルバンガリー及プロテクフ大佐来訪。

〔新聞記事貼付〕

名古屋歩兵第五旅団長から参謀本部付に御栄転遊ばされた東久邇宮稔彦王殿下を御歓迎申上げる御栄転祝賀午餐会が十日正午から帝国ホテル大広間で催された。

鳩山、永井、後藤、中島の各国务大臣を始め鈴木政友会総裁、床次竹二郎、久原房之助、望月圭介、秋田清、小橋一太、松田源治、原脩次郎、片岡直温、田中隆三、依孫一、加藤海軍大将、南陸軍大将、尾野陸軍大将、松井中将、本庄中将、清浦圭吾伯、大隈信常侯、小笠原長生子、有馬頼寧伯、木村久寿彌太、有賀長文氏ら官界、実業界の名士百五十余名が出席して午后零時半御着の殿下をお迎へ申上げた、この日殿下には陸軍通常礼装にて御機嫌麗しく一同と記念撮影の席につかれてのち御歓談裡に御会食遊ばされ同一時五十分御帰還になつた

二月十一日 土曜 曇
賢所御儀式ニ参列シ夫レヨリ参内、御祝宴ニ参列。辞退ノ途中野々村ニテ撮影。

夜、木下通敏、峯旗良充氏来訪。満洲ニ関シ意見ヲ述ベラル。荒木〔貞夫〕陸相ニ紹介。

長隆〔長生の長男〕、つばめニテ上京、十時着。

二月十二日 日曜 晴
午后二時ヨリ七時迄房子材料調査。女中ノ件ヲ聴ク。

二月十三日 月曜 晴
午前九時千坂中将来訪。

同五十分花田半助氏ト同道、再度米井鶴子女史ヲ訪ヒ、観世音ニ関ス

ル法話ヲナシ、昼饗ノ饗ニ与リ一時半帰宅。
同四時日々新聞社ニ至リ全国学童競書審査打合せ会ニ列シ、六時半帰宅。

〔東京日日新聞〕二月十四日付朝刊「学童競書 愈々審査」の記事貼付〕

二月十四日 火曜 晴
午前十一時秀子、武子ヲ伴ヒ中村吉右エ門氏ヲ訪ヒ、昼饗ヲ饗セラレ二時迄快談。又手紙物語中ノ同氏ニ関スル部分ヲ読聴カス（夫妻共ニ感泣）。

二時半帰宅。飯塚氏待チ受ケ居リ、時余ニ互リ最重要協議ヲナシ、其ノ結果近々近衛公、加藤大将ト会谈ノ事ニ取定ム。

夜国士館ノ柴田徳次郎氏来訪。義勇団々々長ノ件及政界ノ近況等ニ付、意見ヲ交換シ二時間ニテ辞去。

二月十五日 水曜 晴
午前九時千坂中将来訪。

同十時第六中学校教授〔空白〕氏来訪。
午后一時ヨリ七時十五分迄房子材料調査。大ニ進捗ス。

二月十六日 木曜 曇
午前九時千坂中将来訪。

同十時ヨリ数十葉ノ揮毫ヲナス。
午后□療治ヲナス。

二月一七日 金曜 雪

午前十一時千坂中将来訪、続イテ南郷少将来訪。同少将ヨリ荒木陸相、大角海相ニ面会ノ件、鈴木喜三郎氏ニ条件ヲ付ケタル件等ヲ報告サル。昼食ヲ共ニシ自動車ニ同乗、途中ニテ別レ会館ニ至リ、午后一時半ヨリ一時間満洲ヨリ一時帰朝ノ小林〔省三郎、満州特務機関長、海軍〕少将ト面会、満洲ノ将来及熱河攻撃ノ件ニ付要重協議ヲナス〔武藤〔信義、陸軍〕大将ノ将来ニ付イテモ協議〕。同三時軍令部総長宮殿下ノお召ヨリ軍令部至リ拜謁。重臣会議ニ関シ御内意ヲ東郷元帥ニ伝フベキヤウ御内命ヲ受ケ、又山本伯ニ関スル件ヲモ拝承シ、約五十分拜謁ノ上、東郷元帥ヲ訪問シテ殿下ノお思召ヲ伝ヘ元帥ノ意見ヲ聴キ辞去シ、日本クラブニ至リ日々新聞正木及博覧会事務総長倉橋藤次郎氏ト面会。東郷館設立委員長ヲ承諾シ、五時半晩翠軒ニ至リ岩村書記官ノ歓迎会ニ列シ八時過帰宅。

二月十八日 土曜 曇

午前八時半三重県ノ〔空白〕氏来訪。
午前九時千坂中将来訪。
午后零時半ヨリ七時十五分迄房子材料調査。
関根氏ノ死去ヲ告ゲラル。

二月十九日 日曜 晴

午前九時千坂中将来訪。
午后一時□療治ヲナス。
午后関根大尉告別式ニ代理トシテ並木ヲ遣ス。

二月二十日 月曜 晴

午前九時千坂中将来訪。
同三十分服部太元帥来訪。
同十時粟田春青氏来訪。小笠原〔長幹〕伯、青木〔信光〕子、渡辺〔千冬カ〕子ニ紹介。

二月二十一日 火曜 晴

午前九時千坂中将来訪。
同十一時南郷少将来訪。大角海軍大臣ヨリノ電話ノ件ヲ議ス。又同少将ハ一昨日大臣官舎ニテ大臣、次官、〔寺島健〕軍務局長ト会見、四時間ニ及ビ終ニ外界ト一切ノ交渉、殊ニ新聞政略ニ関シテ拳テ之ヲ同少将ニ委ネル事ニナリシ旨ヲ告ゲラレ、爾後取ルベキ方針ニ付熟議ス。午后二時半ヨリ七時十五分迄房子材料調査。

二月二十二日 水曜 晴

午前八時二十分重要人物ヲ訪ヒ夫レヨリ終日奔走。其ノ間難人形ヲ見ナドシテ、夜福澤ト某所マデ同行シ、七時四十分帰宅。

二月二十三日 木曜 晴

午前十時千坂中将、南郷少将来訪。連盟脱退後ニ於ケル海軍ノ決心等ニ付意見ヲ交換シ、予及千坂中将ハ明後日大臣ト会見スルコトニナル。午后五時會館總會ニ列シ七時半帰宅。

二月二十四日 金曜 雨

午前九時千坂中将来訪。

午后一時半ヨリ七時十五分迄房子材料調査。

二月二十五日 土曜 晴

午前九時千坂中将來訪。同十時北一輝氏來訪。政界近況ヲ告ケラル。
午后二時東郷元帥邸ニ至リ、次イデ至レル鈴木政友會總裁(崎山氏同道)ヲ元帥ニ紹介ス。連盟脱退等ニ関シ一時間快談ノ後辭去。次イデ予モ辭去シ、予テノ約束ニヨリ大角海軍大臣ヲ官舎ニ訪ヒ(千坂中将先着)、荒木陸相トノ結束ヲ固クシ、力ノ平押ヲ以テ政界ニ臨ムガ今後ノ日本ヲ救フ唯一ノ道ナルコトヲ力説シ、大臣ノ同意ヲ得タリ。
四時予テノ約ニヨリ會館ニテ小笠原伯ニ面會。五時半マデ今後ノ政局ニ付意見ヲ交換ス。

六時飯塚氏ノ招待ニ応シ帝國ホテルニ至リ加藤大將、二荒(芳徳)伯(近衛公モ出席ノ筈ナリシガ病氣ノ為欠席)ト共ニ晚餐ノ饗ヲウチ、シヤムノ件ニ関シ忌憚ナキ意見ヲ交換シ九時散會。

二月二十六日 日曜 晴曇

午前九時千坂中将來訪。

同十時爆彈三勇士ノ一人江下(武二)氏ノ令兄外二名來訪。揮毫ヲ乞ハル。即座ニ書シ与フ。
夜理髮。

二月二十七日 月曜 曇

午前十時加藤東郷會長來訪。暫時ニシテ辭去。
同三十分貴院議員宮田光雄氏、崎山氏ト同道ニテ來訪。政局ノ前途ニ付意見ヲ交換シ、十時半辭去。

午后二時ヨリ七時十五分迄房子材料調査。

二月二十八日 火曜 雪曇

午前九時小谷(文濟)氏來訪。來月七日今泉定介氏、山岡萬之助氏ト會合ヲ乞ハル。諾ス。同三十分、服部太元帥來訪。之ニ元帥ノ色紙(誠)ヲ贈ル。同十時中川少將來訪。之ニ島村元帥伝ノ題字(東郷元帥揮毫)ヲ交付ス。

午后一時半日々(空白)中佐及古島(松之助カ)画伯同道ニテ來リ、來月十七日ヨリ開催ノ博覽會内東郷館ニ於ケル元帥一代ノ人形ニ付予ノ揮毫ヲ乞ハル。又之ニ沢山ノ材料ヲ交付シ夕刻辭去。

夜クルバンガリー氏、トルコ元皇太子ノ秘書ヲ伴ヒ來ル。其ノ要件ハ支那新疆方面ニ回教國ヲ打建テ、同皇太子ヲ直ニ仰カントスル重大要件ナリ(予ハ千坂、飯塚兩氏ヲ同席セシメタリ)予ハ予ノ意見ヲ述べ尚熟慮スベキヲ約ス。

夜秀子、宏子、稽古ニユク。

三月一日 水曜

午前九時千坂中将來訪。同十時盛岡ノ義勇団旗揮毫。

正午山下(知彦、呉工廠總務部員、海軍)大佐、山口(多聞カ、海軍)大佐、大佐來訪。時局ニ関シ訊カル、所アリ。

午后四時大亜細亞協會發會式ニ臨ミ、テンプルスビーチヲナス。

〔結成を遂げた大アジア協會 昨夜東京會館で〕の記事貼付
國際連盟の態度から急進的結成を遂げた大アジア協會は一日午後四時半から東京會館で、荒木陸相、鮑滿洲國駐日代表芳沢前外相、鳩山文

相、本庄中将、近衛文麿公、小笠原長生子、松井石根中将その他の名士百余名を招いて華々しく発会式を挙げた。

今回の創立に当つては陸海軍現役将校、満洲国要人等を含み地域的には東京を始め、全国的に及び上海、北平、大連、奉天、新京ハルビン等に亘つて居り、その主張するところはアジア諸国相互の抗争を排除し、分散分離の状態にあるアジア民族をして一個の連合体となし組織統制を必要とする

といふ希望によつて創立を急いでみただけあつて各委員の鼻息は頗る荒い、劈頭創立委員菊池武夫男の挨拶、委員長村川堅固博士の経過報告あつて、徳富猪一郎氏が会員を代表して挨拶なし続いて来賓の荒木陸相、本庄前関東軍司令官、鮑滿洲国代表芳沢前外相の祝辞があつて式を閉ぢ、晚餐会に移り、井上清純、本多熊太郎、三上參次、下村宏、広田弘毅氏等のテーブル・スピーチがあつて午後七時過ぎ盛會裡に散会した(写真〔略〕は會談中の荒木陸相其他會同の朝野名士)

三月二日 木曜

(〔記事なし〕)

三月三日 金曜 晴

午前二時卅二分十四秒、ヤ、強震アリ。震動時間頗ル長カリシガ、今朝ニ至リ三陸地方震害甚大、殊ニ岩手県釜石ノ如キハ海嘯ノ為メ千二百戸流失、三百戸焼失シタル由ナリ。

午後二時東郷元帥ヲ訪ヒ博覽會東郷館ノ件、其ノ他要談ヲナシ三時辭去。

三時十五分東京日々新聞社ノ招待ニ応シ歌舞伎座見物。吉右エ門氏ノ

部屋ニ至リ一時間快談。又□カ升(二階ノ五)ニハ鳩山夫人母堂アリキ。

午後九時半帰宅。

三月四日 土曜 曇雨

午前九時千坂中将、続イテ北一輝氏來訪。十一時迄政界ノ將來ニ付意見ヲ闡ハス。北氏ハ荒木陸相ヲ首相ニ推シ軍人内閣ヲ造ルコトヲ力説ス。

午後基之ヲ伴ヒ帝都座ニ無數艦隊ヲ見物ス。這ハ全然撃滅ヲ纏メシモノナリ。

夜園田、真崎両氏來訪。七時ヨリ九時半マデ共産党撲滅策其ノ他ニ付意見ヲ交換ス。

三月五日 日曜 雨

午前七時四十分外出。八時三十分重要人物ヲ訪問、夫レヨリ種々奔走。夜加藤ト某所マデ同行、七時四十分帰宅。

三月六日 月曜 曇

午前十時四十分参内。

皇后陛下ニ拜謁被仰付、了ツテ酒饌ヲ賜ハリ午後一時帰宅。

二時半ヨリ七時半マデ房子材料調査。

三月七日 火曜 晴

午前十一時神宮奉齋會ニ至リ今泉、山岡、千坂、小野寺諸氏ト會合、共産党撲滅ニ関シテ意見ノ交換ヲナシ、又次キノ内閣ニ付意見ヲ交換

ス。

午后二時日比谷公会堂ニ至リ皇典講究所以下神職ニ関スル四国隊ノ催ニカ、ル国威発揚祈願祭並講演会ニ列シ、一場ノ講演ヲナシ三時帰宅。実業の世界記者ニ連盟脱退ニ関スル所感ヲ話ス。

午后六時鈴木政友会総裁ノ招ニ応シ柳光亭ニ至ル。千坂、南郷、井上諸氏同席。主人側ヨリハ鈴木総裁、鳩山（一郎）文相、宮田貴族院議員、崎山氏出席。共産党其ノ他ニ関シ意見ノ交換ヲナシ、此方側ヨリハ種々ノ注文ヲ出シ快談シ、晚餐ヲ饗セラレ九時半帰宅。

三月八日 水曜 雪曇

晴天ヨリ降雪アリ。

午前九時国士館ノ卒業式ニ列シ、一場ノ講演ヲナシ正午帰宅。

午后一時服部太元師、岡野登喜子氏ヲ伴ヒ来リ、色紙ノ挨拶ヲ述べラレ二時辞去。

三時七面山ノ小松師来訪。波木井氏贈位ノ件ニ付意見ヲ訊ネラル。

三月九日 木曜 曇

午后二時半ヨリ七時半マデ房子材料調査。

三月十日 金曜 曇

午前九時千坂中将、同十時南郷少将来訪、要談。

午后一時東日社ニ至リ国民歌学童競書大会審査会ニ列ス。四時半閉会。帰途東郷元帥邸ニ立寄。

〔東京日日新聞〕三月十二日付「国難突破 日本国民歌学童競書大会（本社主催）応募数二万九千」の記事貼付）

三月十一日 土曜 雪

晴天ヨリ降雪アリ。午前中ニテ歇ム。

午前九時千坂中将来訪。

午后一時ヨリ東日社ニ至リ審査ヲ継続本日ニテ終了。

午后六時ヨリ越澤氏ノ招待ニ応シ築地八百善ニ至ル。元帥揮毫ノ花入ノ披露会ナリ。会スル者徳川家達公、入江、青木、渡邊、加藤四子、本多男、河合玉堂画伯ニシテ、丁重ナル会席料理ヲ饗セラレ九時辞去。本日朝日新聞社社会部員磯辺佑治氏ヨリ東郷元帥面会ヲ依頼セラル。

三月十二日 日曜 晴

午后二時ヨリ七時半マデ房子材料調査。

三月十三日 月曜

〔記事なし〕

三月十四日 火曜 晴

午前七時四十五分外出。重要事項ニ付某氏訪問、同道ニテ終日行動ヲ共ニシ夜七時四十分帰宅。同日某氏帰出京。

三月十五日 水曜 晴

午前九時千坂中将来訪。

午后二時二十分ヨリ七時半マデ房子材料調査。

三月十六日 木曜 雨

日々社ノ依頼ニヨリ、午前十一時上野不忍池畔ノ万国婦人児童博覧

会々場（明日ヨリ開会）東郷館ニ至リ、元帥ノ経歴、人形、三十場面ヲ訂正シ精養軒ニテ昼食ヲナス。

午后二時品川妙国寺ニ至リ「日生上人ヲ偲ブ」ニテ一場ノ講演ヲナシ四時帰宅。

夜散髪。

三月十七日 金曜 晴

午后二時浅草寺ノ招待ニ応シ同寺ニ参ス。同寺は昭和四年五月起工以來、四年越ノ大修繕ヲ了リ、昨夜御遷座了リシモノニテ、本日落慶報告式執行セラル、ヲ以テナリ。

式ハ最莊嚴ニ行ハレ〔山本達雄〕内務、文部両大臣、〔香坂昌康〕府知事長、天台座主、連合仏教会総代ノ祝辞二次イデ、予ハ信徒総代トシテ祝辞ヲ述ブ。式後清水谷師ニ伴ハレ伝法院ニ至リ記念箔〔ママ〕（達筆ノ如意ニシテ御本堂ノ故材ヲ以テ作レルモノ）ヲ受ケ夕刻帰宅（小笠原伯夫人モ列席）。又参詣ノ途次、記念トシテ水晶ノ念珠ヲ購フ。予ハ本日程嬉ミヲ感シタル事ハ恐ラク一生涯通シテ稀有ノ事ナルベシ。〔本堂大修繕 落慶報告式次第〕貼付

三月十八日 土曜 晴

午后二時ヨリ八時迄房子材料調査。

今夜夢ニ明治天皇ヲ拝シ奉ル。

三月十九日 日曜 晴雨

午前十時池袋駅ニ至リ、武蔵野鉄道株式会社ノ招待ヲ受ケ、奥多摩吉野村ニ至リ約一万本ノ梅樹中ヨリ予選セラレタル三十三本ニ就、八本

ノ名木選定ヲナシ（予委員長ニテ委員ハ本多静六博士等十名）、寒山寺ニ詣シ天覧山東雲亭ニテ丁重ナル晚餐ヲ饗セラレ九時半帰宅。予ノ選定セルハ

17、19、21、○22、23、25、29、32ナリ。本月二十七日開票ノ筈。興深シ。

〔吉野梅林八名木投票会〕の投票木配置略図貼付

三月二十日 月曜 晴

午前九時半土屋〔正直〕、牧野〔貞亮〕両侍従、桃花会ノ件ニ付来訪。同三十分峯田一步氏来訪。之ニ東郷元帥筆祝ノ字ヲ交付ス。

午后一時南郷少将ノ紹介ニテ青森県ノ青年団小宮山利三郎氏、占守島移住ノ件ニ付来訪。千坂中将ト共ニ賛成員トナル。

同五時浅草寺住職大森僧正、清水谷執行来訪。十七日ノ謝意ヲ述ベラル。之ニ東郷元帥筆ノ色紙ヲ贈ル。

三月二十一日 火曜 晴強風

午前頭山満翁ノ紹介ニテ〔空白〕氏来訪。

同十一時千坂、南郷両将来訪、要談。昼食ヲ共ニス。両氏一時辞去。

一時日々ノ正木氏来訪。之ニ審査員長トシテノ所感文ヲ交付ス。又同時謝儀ヲ受ク。

同三十分栗田特務士官来訪。

同二時服部太元師来訪。之ニ予ガ揮毫ヲ岡埜氏ニ贈ル。

同三時半孝長、宏子ヲ伴ヒ新歌舞伎座ヲ見物。大二面白カリキ。

三月二十二日 水曜 晴

午後二時十五分ヨリ七時半マデ房子材料調査。

夜理髮。

三月二十三日 木曜 雨晴

三月二十八日 火曜 雨

午前七時三十五分外出。一日重要事ニテ奔走。夜参宮橋ヨリ電車ニテ七時四十五分帰宅。

午後一時ヨリ七時マデ房子材料調査。房子ハ夫レヨリ同級会ニ出席ノ由。

三月二十四日 金曜 晴

三月二十九日 水曜 晴

午前十時千坂、南郷兩将来訪。要重談ヲナス。

午前三十余枚ノ揮毫ヲナス。

同十一時実業の日本社加藤氏ヲ招キ「手紙物語」ノ原稿二百枚ヲ交付ス。

午後一時ヨリ五時マデ「実業の日本」社員加藤氏外二名来訪。「手紙物語」ノ手紙及写真ヲ撮影ス。

三月二十五日 土曜 曇雨

三月三十日 木曜 晴

午前揮毫。

午前九時千坂中将来訪。

同十時世田ヶ谷署高等掛先崎氏来訪。

午後一時日々ノ正木氏来訪。其ノ持参ノ拙筆ノ幅ノ箱書ヲナス。

午后一時ヨリ六時半マデ房子材料調査。夫レヨリ同窓会ニ出席。

午後一時ヨリ四時マデ「実業の日本」社員、昨日ノコリヲ撮影ス。

三月二十六日 日曜 晴曇

午後三時東郷元帥ヲ訪ヒ、次ニ来ルベキ内閣ノ海相ハ依然大角然ルベキ旨ヲ述べ、又コノ事ハ大角ニモ承諾セル旨ヲ告グ。

午前九時千坂中将来訪。

同四時宮内大臣官舎ニ至リ学習院評議会ニ列席。了リテ大臣ヨリ丁重ナル晚餐ヲ饗セラル。又湯浅〔倉平、宮内〕新大臣ト種々談話ヲ交換ス。同大臣ハ予ノ考作ヲ讀ミテ其ノ話出ツ。九時帰宅。

午後零時四十分發汽車ニテ長隆京都ニ帰ル。宏子同半。

三月二十七日 月曜 雨

三月三十一日 金曜 雨

午前九時半実川時次郎氏来訪。トルコプリンスノ件ニ付、費用ノ点ハ自分ニ任セクレヨト申出ラル。又平沼男ノ件ニ関シテモ意見ヲ交換シ

午後二時ヨリ七時マデ房子材料調査。

十一時半辞去。

午後秀子、みつを伴シ歌舞伎見物。

四月一日 土曜 晴

午前九時千坂中将来訪。

午后一時東京駅ニ至リ故松村〔龍雄カ、海軍後備役〕中將ノ遺骨ヲ送ル。同三十分帰宅。

二時佐藤〔鉄太郎、海軍退役〕中將一族七名来訪。四時辞去。五時佐々木八十八氏来訪。夕食ヲ共ニシ七時半辞去。

八時吉右エ門氏、地震加藤ヲ放送、上出来。

四月二日 日曜 晴

午前七時四十分外出。同八時十分藤沢氏ヲ訪ヒ夫レヨリ重要事ニ奔走。〔中略〕午后七時二十分帰宅。

四月三日 月曜 晴

午前九時東京駅ニ至リ佐々木八十八氏ノ帰坂ヲ送ル。

帰途丸ビルニテ□ノ富士ノ額ヲ購フ。十時帰宅。千坂中將待チ居タリ。

同十一時中川少將、島村元帥伝記ニ付来訪。

午后四時田中検事来訪。

同七時半坂崎氏来訪。

四月四日 火曜 雨

午后二時ヨリ七時半マテ房子材料調査。

愉快ニ進捗。

四月五日 水曜 曇少雨

午前九時千坂中将来訪。

同三十分三十余枚ノ揮毫ヲナス。

午后一時四十分曹洞宗々務院ニ至リ堀内〔文次郎、陸軍退役〕中將、

三井清一郎氏等ト満洲別院設立ニ関スル協議ニ与ル。

同三時ヨリ会館評議会ニ列ス。

同四時東郷元帥ヲ訪ヒシニ持病ニテ臥床セラレ居タリ。

四月六日 木曜

〔記事なし〕

四月七日 金曜 雨

午后一時ヨリ七時迄房子材料調査。

四月八日 土曜 曇

午后一時日本倶楽部ニ至リ連盟脱退詔書ノ国民奉戴式準備会ニ列ス。

同三時半東郷元帥ヲ訪フ。病氣臥床セラル。

〔『東京日日新聞』四月九日付朝刊「連盟脱退詔書 奉戴式 天長節の佳辰に全国から集る五万人」の記事貼付〕

四月九日 日曜 雨

午前十時千坂中將、南郷少将来訪。昼食ヲ共ニス。

午后六時日比谷公会堂ニ至リ観世音ニ関スル講演ヲナス。聴衆三千人

大ニ満足ス。殊ニ予ガ対告衆トシテ選ベル目的ノ人来リ大ニヤリヨカリシ。

午后十時十分長隆、宏子、京都ヨリ帰宅。

〔浅草寺観音祭のプログラム貼り付け〕

四月十日 月曜 曇

午前九時ヨリ午后二時迄房子材料調査。

午后五時半紅葉館ニ至リ桃花会（高輪御時代奉仕者ヨリナル会ナリ）ニ列シ八時半帰宅。

四月十一日 火曜 曇晴

午前七時半外出。重要事項ニ付奔走。夜重要人物ト〔空白〕駅マデ同行シ八時帰宅。

四月十二日 水曜 晴雨

午前十時加藤大将来訪。十一時半マデ重要談話ヲナス。

午后一時上野自治館ニ至リ博覧会ノ催ナル東郷元帥感謝デーニ出席。元帥ニ関スル一場ノ講話ヲナシ、了リテ東郷館ヲ見、海洋少年団ヲ閲シ午后三時半帰宅。

四月十三日 木曜 雨

午前九時千坂中将来訪。

午后一時半ヨリ七時半マデ房子材料調査。

四月十四日 金曜 曇

午前十時書道院事務員来訪。今般大阪ニ於ケル名士展覧会ニハ予ノ値ダン付ハ一枚五十円トシタシト申来ル。

午后一時東郷元帥ヲ訪問。快方ニ向ハレ遠カラズ全快アルベク、約二十分談話ス。

同三十分岩佐〔禄郎、陸軍〕少将（朝鮮憲兵司令官）ヲ偕行社ニ訪問

（不在）シ、帰途加藤大將ヲ訪ル（不在）。
四時帰宅。

四月十五日 土曜 曇

午前関根氏墓銘其ノ他ヲ揮毫ス。

午后四時半北一輝氏来訪。始メテ予ト鈴木喜三郎氏ト交際アルヲ知りタル如ク、鈴木氏ニ面会、重大事ヲ説キシニ、予ニ相談スベシト答ヘタリトテ大ニ驚キ居レリ。又北氏ハ是非トモ予ニ内大臣タルベキヲ勸告ス。勿論辞退ス。
夜理髮。

四月十六日 日曜 曇

午前十時田中檢事来訪。次キノ司法大臣トシテ清浦内閣当時ノ逡信次官井上〔ママ、米田奈良吉の誤りか〕氏ヲ推薦シタシト語ラレ（次官ニハ宮城〔長五郎カ〕檢事正カ塩野〔季彦カ〕氏）、来ル廿四日同道予ヲ訪問スベキヲ約ス。
本日房子材料調査ニ来ル筈ナリシガ女中不在ノ為メ遂ニ来ラズ。

四月十七日 月曜 曇

午后一時半本郷東片町大円寺ニ至リ、予ガ寄進ノ千手觀世音ノ尊像出来ヲ拜シ、作者高村光雲、三木及部服（服部）太元帥ト共ニ記念札撮影ヲナシ
午后四時四十五分帰宅。

五時十分ヨリ八時半マデ房子材料調査。

四月十八日 火曜 晴

午前八時半岩倉具顕氏ノ紹介ニテ、ワールド通信員窪田磯児氏来訪。
予ノ談話ヲ筆記ス。

九時千坂中将来訪。十時台湾人許氏及迫田氏来訪。

十一時山下大佐来訪。午后一時楠公会ノ福田氏同道ニテ兵庫県福厳寺

住職磯瀬宜睦来訪。平知章邸ノ墓銘揮毫ノ挨拶アリ。

同二時実業日本社佐藤氏来ル。本日ヲ以テ手紙物語全部脱稿。同四時

本田仙太郎氏来訪。予ニ東京市長タランコトヲ懇請ス。固辞ス。四時

半埼玉県吉祥寺三崎良衆、常光寺小久保豊四来訪。来月二十日講演ヲ

乞ハル。承諾ス。同五時佐々木八十八氏来訪。

夜クルバンガリー氏及土人ボリシン氏来訪。今般実川時次郎氏ノ配慮

ニテ、トルコノプリンスアブトルカリム氏ヲ迎フルノ費用及一年間ノ

費用（毎月千円）ノ出金者出デタル旨ヲ告ゲラレ、予ノ写真及名刺ヲ

乞ハル。之ヲ与フ。尚実川氏ノ背後ニハ平沼騏一郎男アリ。ボクシン

氏ハ明後シンガポールニ出発、プリンスヲ迎ヘテ来月十八日神戸着ノ

予定。予ハコノ大要ヲ参謀本部ノ小畑少将ニ電話ス。

四月十九日 水曜 曇

午后一時四十分ヨリ七時半マテ房子材料調査。

四月二十日 木曜 雨

午前七時半外出。重要事項ニ従事シ、午後七時半四街道マデ某氏ト同
道。八時帰宅。

四月二十一日 金曜 曇

午前八時半田中検事来訪。

午后一時発ノ「富士」ニテ秀子西下。東京駅ニ見送り、夫レヨリ急ニ
思ヒタチテ藤沢氏ヲ訪ヒ夜ニ入ルマデ懇談。八時半帰宅。

四月二十二日 土曜 晴驟雨

午前九時千坂中将来訪、続イテ実川時次郎氏来訪。三人ニテトルコプ

リンス来朝ノ件ヲ論シ、結局平沼男中心ニ置キ予等ニテ方針等ヲ定ム

ルコトニ決ス。

午后一時二十分ヨリ七時半マテ房子材料調査。

四月二十三日 日曜 晴曇

午前八時半西田税氏来訪。

同九時千坂中将来訪。

同三十分南郷少将来訪。

同時曹洞宗僧侶（空白）師、満洲観音ニ付来訪。

同十時武蔵野電鉄会社柳氏来訪。吉野ノ梅当選ヲ報ラル。即チ一等ニ

ハ十九号、二等ニハ廿二号、五号、三等ニハ七号、廿一号、六号、廿

九号、二号ナリ。

午后一時付近ヲ散歩ス。

二時十数枚ノ揮毫ヲナス。

午后一時付近を散歩。

同四時中村、小川両氏来訪。

四月二十四日 月曜 曇晴

午前十時千坂中将ト共ニ来訪ノ米田奈良吉氏（田中検事同道）ニ面会。

時局ニ付意見ノ交換ヲナシ正午辞去。

宏子、房子ヲ伴ヒ午后三時半浅草寺ノ招待ニ応シ伝法院ニ至リ、時齋ヲ供セラレタル後、観世音堂内陣、内々陣等ヲ拝見ノ後、内陣ニテ閉鎖式ニ列シ記念品ヲ受ケ、新宿駅マデ房子ヲ送り七時帰宅。
夜東朝記者磯部氏来訪。東郷元帥ノ近況ヲ訊ネラル。

四月二十五日 火曜 晴

午前八時四十分ヨリ午后二次迄房子材料調査。

午后三時ヨリ四時過マデ北一輝氏来訪。次キノ組閣ニ関シ予ニ重大ナル奔走ヲ望マル。明日千坂、南郷両氏ト協議ノ上決スベキ旨ヲ答フ。
午后五時半平沼男ヲ大久保ノ邸ニ訪ヒ、トルコプリンスノ件ニ付意見ヲ交換シ七時過帰宅。

四月二十六日 水曜 雨

〔記事なし〕

四月二十七日 木曜 晴

午前七時外出。重要事ニテ終日大車輪、好結果。

四月二十八日 金曜 曇雨晴

午前七時半外出。昨日同様好結果。

四月二十九日 土曜 晴

午前十一時参内、拝賀ノ後宮内省ニテ酒饌ヲ賜リ、午后一時五十分例ノ如ク先御学問所員御座所ニテ拝謁、種々懇談ノ後茶菓ヲ賜フ。

午后二時四十分日比谷公会堂ニ至ル〔別紙参照〕。

〔「国際連盟脱退詔書奉戴式」の記事貼付〕

連盟脱退に際し畏くも詔書を賜はるに至つたのでこれを奉戴し聖旨に對へんとする天長節奉祝国際連盟脱退詔書奉戴式が文部省東京市府中央教化団体連合会の後援にて二十九日午後二時日比谷公園広場に於て厳肅盛大裡に行はれた。各青年団、婦人会、青年訓練所学生、日本新聞協会、帝國在郷軍人会等之に参加する団体の会員三万、一般有志の之に会するもの二万の多数に上つた。会場の公会堂バルコニーには春陽を浴びて華やかな紅白の幔幕がはためく。頭山満翁司会の許に柴田徳次郎氏開式の辞の後君ヶ代奏楽裡に国士館所蔵の世界一を誇る大國旗掲揚式あり次で国歌を二唱し、有馬良橘大将の詔書奉讀、徳富猪一郎氏の詔書奉戴誓詞ありたる後齋藤首相、荒木陸相、大角海相、鳩山文相、徳川貴族院議長、秋田衆議院議長、鈴木、若槻、安達の各総裁及清浦圭吾伯、小笠原長生子等大官名士の詔書に對する感激の詞あり、聖寿万歳を三唱し午後三時半丸山鶴吉氏の閉会の辞にて式を終へ非常時日本国民の協力戮力の意気を發揚した

四月三十日 日曜 晴

午前九時半東郷元帥邸ニ至リ東郷会ニ列ス。会スルモノ三百余名。元帥トノ会見了ツテ宝亭ニテ昼食。予ハ一場ノ講演ヲナス。

同二時小笠原伯ヲ牛込ノ邸ニ訪ヒ時局ニ関シ意見ノ交換ヲナス。四時帰宅。

五時大橋弓子女史来訪。東郷元帥ノ箱書ヲ乞ハル。

五月一日 月曜 曇

午前十時二十分ヨリ午后五時まで房子材料調査〔平仮名ママ〕。

五月二日 火曜

午前九時千坂中将、同十時南郷少将来訪。重要事項ニ付協議。
夕刻ヨリ日々新聞ノ招待ニ応ジ晩翠軒ニ至リ晚餐ヲ饗セラル。

五月三日 水曜 暴風雨

午前七時二十分風雨ヲ衝イテ外出。重要事項ニテ終日兩人ニテ全力ヲ
拵グ。夜ニ入り晴ル。八時過帰宅。

五月四日 木曜 晴

午前九時博覧会ニ至リ久邇大妃〔邦彦王妃倪子〕殿下、山階大妃〔菊
麿王妃常子〕殿下ヲ迎へ奉り終日随行。午后三時半芝ノサーカスニテ
拝辞。

午後六時會館ニテ徳川館長ト共ニ湯淺宮内大臣、大谷〔正男、宮内〕
次官、白根〔松介〕内蔵頭ヲ招待シ晚餐ヲ饗ス。九時帰宅。

〔東京日日新聞〕五月五日付朝刊「久邇、山階両宮大妃殿下 婦人子
供博へお成り本社特設館へも御立寄り」の記事貼付

五月五日 金曜 晴

正午新宿御苑ヲ拝借シ宮中顧問官ノ親穆會ヲ行フ。午后二時帰宅。
本日東郷元帥、伊豆伊東ノ別荘へ転地セラル（約二週間滞在ノ予定）。

五月六日 土曜 晴

午前十時二十分ヨリ午后五時半マデ房子材料調査。
夜買物ニ出ツ。

五月七日 日曜 晴

午前九時千坂中将来訪。
午后買物ニ出ツ。

夜軍令部ノ石川中佐、在満小林少将ヨリ予ニ面会シタシトノ伝言ヲ齎
シ来ル。同少将ハ九日朝着京ノ予定、乃テ十日面会ヲ約ス。

五月八日 月曜 晴

午前七時二十分外出。重要事項ニテ夜ニ入ルマデ尽力。

五月九日 火曜 曇驟雨

午前七時半外出。前日ニ引続キ夜ニ入ルマデ尽力。八時四十分帰宅。
兩日共ニ満足ニ進行、喜悅ニ堪ヘズ。

夕刻雷鳴驟雨アリシガ暫時ニシテ霽ル。

五月十日 水曜 曇驟雨

午後六時赤坂山王ホテルニ至リ小林章三郎少将ト面会（真木大佐、石
川中佐同席）。満洲ニ関スル重要事項及海軍側トシテ元帥ニ関スル意
見ノ交換ヲナシ晚餐ヲ共ニシ九時辞去。

九時二十分三兒女ト共ニ秀子ノ関西ヨリノ帰京ヲ迎フ。

五月十一日 木曜

〔記事なし〕

五月十二日 金曜 曇

午前十時十五分ヨリ午后五時迄房子材料調査。

五月十三日 土曜 晴

午后一時日々新聞社ノ請ニ応シ東京會館ノ日本海々戦ニ於ケル東郷元帥ヲ中心トシタル座談会ニ列シ主催者トナル。会スルモノ山本英輔〔軍事參議官、海軍〕大将、枝原〔百合一、航空廠長、海軍〕、布目〔満造、海軍後備役〕、飯田〔久恒カ、海軍後備役〕各中将ニテ三時半之ヲ了ル。

五月十四日 日曜 晴

午前十一時半本郷東片町大円寺ニ至リ、予ガ揮毫〔百八十枚〕ニ依リ寄進シタル千手觀世音（高サ約九尺、高村光雲、三木宗策両氏作）ノ開眼式（北野元峰禪師親行）ヲ行フ。会スルモノ数千人、頗ル盛会ナリキ。

本日山本端雲氏ヨリ千手觀世音ノ懸顔彫刻ヲ贈ラル。

〔千手觀音と馬頭觀音 盛大な開眼式〕の記事、「法要次第」貼付）
本郷区

子爵小笠原長生氏は氏の守り本尊□〔空白〕ある千手觀音と馬頭觀音の立像二体を本郷区東片町六六曹洞宗大円寺に寄贈する為め予ねて高村光雲氏に彫刻を依頼してゐたが、この程見事に出来上がったので、去る十四日大円寺に寄贈した、同寺ではこの日午後一時から両觀音像の開眼式を盛大に行つたが、千手觀音は皇国守護、馬頭觀音は軍馬、軍犬、軍用伝書鳩の追悼の為め何れも九尺の立像である、越前の本山永平寺から管主北野元峰氏が態參列し東京市内曹洞宗各寺住職僧侶等百卅人の外閑院參謀總長宮、伏見軍令部長宮、荒木陸軍大臣の各代理及び小笠原子爵、満洲国公使丁士源氏其他名士多数參列し除幕式後読経に移り最後に小笠原子爵の講演あつたが、この日の參詣者は約

三千人で盛大であつた。

五月十五日 月曜 曇雨

午前九時二十分ヨリ午后二時迄房子材料調査。

五月十六日 火曜

〔記事なし〕

五月十七日 水曜 曇雨

午前七時半外出。終日重要事件ニ従事。夜八時帰宅。大満足。

本日温度八十度三分。

五月十八日 木曜 曇

午前八時二十分ヨリ午后三時迄房子材料調査。不愉快ノ事アリ。

五月十九日 金曜 曇

午前九時千坂中將來訪。

午后零時半東郷元帥ヲ訪ヒ、トーカーノ手伝ヲナス。又海軍側元帥ニ付意見ヲ交換ス。

実川氏、トルコプリンス迎ヘニ神戸ニ向フ。

〔東京朝日新聞〕五月二十日付朝刊「東郷元帥『此一戦』へ朗かに録音撮影」の記事貼付）

五月二十日 土曜 晴

午前十一時上野発汽車ニテ出発、午后零時二十分熊谷着。出迎ヘノ天

台宗僧侶ニ迎ヘラレ〔空白〕寺ニ至リ壬生舜〔空白〕師等ニ面会、午餐ヲ饗セラレ二時ヨリ女学校講堂ニテ「東郷元帥ノ信仰」ニ付一場ノ講演ヲナシ三時半ノ汽車ニテ帰京。

〔手紙点描偉人天才物語〕全部校正済。

五月二十一日 日曜 晴

午前十時ヨリ午后三時迄房子材料調査。

本日午前九時トルコ旧皇太子アブドール・カリム氏入京。同氏来訪ニ関シテハ実川時次郎氏専ラ斡旋ノ勞ヲ取り、予之ニ与レリ。

本日暑氣八十度五分ニ昇ル。

〔旧トルコノプリンス入京〕の記事貼付

廿一日午前九時東京駅着の列車で旧オスマン・トルコ帝国のプリンス、アブドール・カリム氏(二九)が入京した。

一九二四年ケマル・パシャが大統領に就任すると共に同氏も旧皇族の一人として追放され回教徒のある国々を訊ねて世界放浪の旅に出て廿日神戸に着いたものである(写真〔略〕は帝国ホテルのカリム氏)

五月二十二日 月曜

〔記事なし〕

五月二十三日 火曜

午后四時會館ニ至リ徳川公ノ学習院赤化防止ニ対スル諮問ニ答フ。

同六時ヨリ同所ニ開催セラル、トルコプリンスノ懇親会ニ列ス。会スルモノ一條〔実孝〕公、井上男、樺山資英氏、千坂中将、菊池〔武夫〕男、実川時次郎氏、クルバンガリー氏ナリ(クルバンガリー氏通

訳ニ当ル)種々将来ノ件ヲ議シ八時半散会。

五月二十四日 水曜 晴

午前九時十分ヨリ午后二時半迄房子材料調査。

午后五時貴族院議長官舎ニ至リ学習院評議会ニ列シ、七名中ノ特別委員ニ選バレ赤化防止ヲ研究スルコト、トナル。

五月二十五日 木曜 晴

午前十時半駒込中学校(天台宗ニテ設立)ニ至リ日本海々戦ニ関シ一場ノ講演ヲナシ正午帰宅。

午后来客多ク十余名ニ及ブ。

五月二十六日 金曜 晴曇

午前七時外出。後日二人ニテ重要事ニ従事シ最好結果ヲ得テ午后九時十五分帰宅。〔後略〕

五月二十七日 土曜 晴

海軍記念日ニ付午前十一時水交社ニ至ル。

同四十五分幸行祝宴^(マツ)後大相撲展覧、玉錦優勝。

五月二十八日 日曜 曇

午前九時ヨリ午后二時半マテ房子材料調査。

不愉快ノ事アリ。

夜園田少将、真崎大佐来訪。時局ニ付約二時間意見交換。

五月二十九日 月曜 晴

午前房子来リ三十一日ハ夕刻ヨリ来ル旨ヲ告グ。

午前服部太元外僧侶一名来訪。

愛国婦人会総務〔空白〕氏来訪。満洲行キヲ乞ハル。辞退シ堀内中将ヲ推薦ス。

午后二時海軍省ノ希望ニ応シ日比谷公会堂ニ至リ、海軍省後援ニテ愛国婦人会、軍人後援会、将校婦人会、外三団隊主催ノ戦死者遺族、傷痍者慰安会ニ一場ノ講演ヲナシ三時帰宅。
夜佐々木八十八氏来訪。

五月三十日 火曜

〔記事なし〕

五月三十一日 水曜 晴

午后二時半ヨリ七時迄房子材料調査。

不在中満洲国駐日本特命全權公使丁士源氏来訪。

六月一日 木曜 晴

午前十時参内、拜謁。

正午会館ニ至リ徳川公ニ代リテ創立記念式ヲ司ル。総裁雍仁親王殿下台臨、宮内大臣、次官、宗秩寮総裁、学習院両院長来賓トシテ参列〔会員五十七名〕。式後午餐、二時終了。

答礼トシテ満洲公使丁士源氏ヲ訪フ。

三時頭山満翁ヲ訪フ。

帰宅後來客数名ニ接ス。

夜伏見宮邦芳王殿下薨去ニ付、長生ニ葬式委員長ヲ依托セラル。

六月二日 金曜 晴

午前九時伏見宮家ニ伺候ス。博恭王殿下ニ拜謁。委員長依托ノ御言葉ヲ被ル。終日勤務。午后九時帰宅。

六月三日 土曜 晴

午前十時出勤。午后七時三十分正寝移柩ノ儀アリ、了リテ退出。

六月四日 日曜 晴

午前五時半使ヲ房〔子〕方ニ遣シ之ヲ招ク。七時ニ来ル。夫レヨリ正午迄調物ヲ托ス。

午后一時出勤〔途中迄宏子、房子ヲ同乗セシム〕、九時帰宅。

六月五日 月曜 晴

午前十時出勤。同三十分勅使ヲ奉迎。

午后二時豊岡ニ至リ、諸員ヲ集メテ御葬儀当日ノ打合せヲナス。再ヒ宮家ニ戻ル。

七時三十分靈代安置ノ儀アリ、了リテ退出。

六月六日 火曜

午前四時起床。六時二十分出勤。

午前七時斂葬当日柩前祭ノ儀アリ。

九時靈車発引。途中御函簿割別紙ノ如シ。

〔邦芳王殿下 けふ、御喪儀〕の記事〔文字不鮮明のため省略〕、函

簿割貼付

六月七日 水曜 雨

午前九時半出勤。十時斂葬後一日権舎祭ノ儀アリ。午后二時斂葬後一日墓所祭ノ儀アリ。了リテ退出。

帰宅後「閣正」(日の出ヨリ依頼)起稿。

六月八日 木曜 曇

午前十時ヨリ午后二時半マデ房子材料調査。

夜雅^(號)寿園ニ秀子、宏子ト共ニ至リ松井久氏、(空白)氏夫妻ト晚餐ヲ共ニス。

六月九日 金曜 晴

宮中ニ於テ午餐ヲ賜ハル。東久邇宮殿下台臨。

午后二時東郷元帥ヲ訪フ。半沢某ヨリノ意見書(牧野〔伸顕〕内府崇拜者)ヲ示サル。夫レニハ武藤元帥ヲ満洲国ヨリ呼返シ、文官ヲ以テ充ツルヲ得策トスル旨論ジアリ。予ハ不同意ヲ力説セシニ元帥モ同感ナル旨ヲ答ヘラル。

三時帰宅。加藤大将、千坂中将来訪。

加藤大将ハ途中ノ電車内ニテ孝長ト会シ、孝長ヨリ「あなたは加藤大将デハアリマセンカ、僕ハ小笠原デス」ト云ヒ、宅マデ同行シタルテ
口ヲ極メテ孝長ヲ称揚セリ。

六月十日 土曜 晴

伏見宮邦芳王御十日祭御執行、凡テ御□□祭ニ同シ。

午后三時半帰宅。夕食後近辺ヲ散歩シ新築ヲ見ル。

六月十一日 日曜 晴

午前十時ヨリ午后三時迄房子材料調査。

六月十二日 月曜 晴

午前七時外出。終日重要事ニ従事。然シテ四ヶ所ヲ訪問シタルモ、不在ニテ面会セズ。但シ希望大ニ好転、愉快ニ堪ヘズ。帰途ハ深澤ト某所マデ同行シテ相別レ九時帰宅。温度八十度。

六月十三日 火曜 曇

午前松村中将ノ記念碑及平知章ノ記念碑(共ニ予ノ撰文)ヲ書ス。

午后四時千坂中将来訪。

夜ニ入り降雨アリ。

六月十四日 水曜 曇晴

午前九時四十分ヨリ午后三時迄房子材料調査。頗ル進捗。

六月十五日 木曜 晴

午前九時千坂中将、南郷少将ヲ招キ人事行政ニ付重要協議ヲナシ、其ノ結果南郷少将即日大角大臣ヲ訪問、事情取調べノコト、トナリシガ、夕刻同少将、大臣ノ伝言ヲ齎シテ再ビ来訪。其ノ詳細ノ事情ヲ聴キ予モ納得ス。

夕刻「富士」記者来リ真山青果氏、東郷元帥伝ノ一節ヲ脚色シタキニ

付予ニ面会シタシト申込マル。仍テ十八日面会スベキヲ約ス。
予ノ勸告功ヲ奏シ鈴木喜三郎氏無任所大臣謝絶ト決ス。

六月十六日 金曜

「書簡点描偉人天才を語る」製本出来。

六月十七日 土曜 晴

午前十時ヨリ午后三時迄房子材料調査。

夜放送局ヨリ来廿三日偉人ヲ語ルタニ出席、放送ヲ請ハル。相手ハ中島〔久万吉〕商相、鶴見祐輔氏ナリ。予ノ題ハ「海賊大將軍」。

六月十八日 日曜 曇晴

午前七時外出、終日重要事ニ従事シタモ、嘗テ無キ不成績ニテ不愉快ニ堪ヘズ。快々トシテ同志ト別レ途中ヨリ電車ニテ帰ル。

六月十九日 月曜 晴

午前放送局新美氏来リ打合セヲナス。

同朝日記者藤本氏来リ、少年団ヲ東郷元帥邸ニ參セシムル件ニ付希望ヲ述べラル。

同十時渋谷署ニ至リ、同署及世田ヶ谷、目黒三署員ニ日本海々戦ノ講話ヲナス。十時四十分帰宅。

午后一時ノ燕ニテ秀子、京都ニ赴ク。武子ト共ニ之ヲ東京駅ニ送ル。帰宅後千坂中将、南郷少将来訪。八時半マデ重要談ヲナス。

六月二十日 火曜 晴

故邦芳王御廿日祭御執行ニ付委員長トシテ参列。午后三時半帰宅。同四時ヨリ八時迄房子材料調査。
佐々木倆子夫人来訪。

六月二十一日 水曜 雨

午前十一時理事会ニ出席。

午后二時佐々木夫人ヲ三浦家ニ訪問。

同三時会馆ニ引帰ヘシ特別会議ニ出席。

六月二十二日 木曜 晴雨曇

午前六時半外出。終日重要事ニ従事、成績最良好、愉快ニ堪ヘズ。午后甲州街道ニテ別レ八時五十分帰宅。

六月二十三日 金曜 雨

午前十一時中村吉右エ門氏ノ招ニ応シ武子ヲ伴ヒ同家ニ至リ、同夫妻及大橋氏ト快談。昼食ヲ馳走ニナリ午后二時半辞去。

午后七時放送局ニ至リ八時ヨリ同三十分迄「海賊大將軍」ノ題ニテ放送。今夕ハ「偉人ヲ語ルタ」トシ中島商相、鶴見祐輔氏ト共ナリキ。

六月二十四日 土曜 曇

午后一時半ヨリ七時半マテ房子材料調査。

不愉快ノ事アリ。

午后八時園田少将、真崎大佐来訪。九時半マテ重要談話ヲナス。

六月二十五日 日曜

皇太后陛下御誕辰ニ付、午前十一時赤坂御所ニ伺候、拝謁ノ後酒饌ヲ賜リ二時帰宅。

本日午前九時高村光雲翁、服部太元師ト同道ニテ来訪。予ノ放送ヲ頻リニ讚メラル。汗顔ノ至リナリ。

六月二十六日 月曜 晴

午前六時半外出。終日重要事項ニ従事。訪問者ニ少々故障アリシモ談話爽快、恰モ新衣ヲ着ル如ク心地ヨカリキ。

帰途加藤ト千駄ヶ谷マテ同道、同所ヨリ電車ニテ九時帰宅。

諸方ヨリラヂヲニ関スル感謝状到ル。

六月二十七日 火曜 晴

午前八時二十分東伏見宮邸ニ伺候シ、妃殿下〔依仁親王妃周子〕ニ拝謁〔新暑書献上〕ノ後、依仁親王御十一年祭ニ参列ノ上九時半帰宅。

諸方面ニ挨拶状ヲ認ム。

久々ニテ慶子〔長生三女、佐々木清隆〔隆一〕夫人〕ヨリ書面至ル。

放送ヲ喜ビ其ノ他種々申来ル。直ニ返書ヲ出ス。

午后四時會館ニ至リ特別委員会ニ列ス〔学習院ノ赤化防止ニ付〕。

本日暑氣九十二度ニ昇リ、四十五年來ノ事ナリト云フ。

六月二十八日 水曜

午后二時ヨリ七時半マテ房子材料調査。

六月二十九日 木曜

午后四時會館ニ至リ特別會議ニ列シ六時帰宅。

六月三十日 金曜 曇

邦芳王御三十日祭。

夕刻ヨリ水交社ニ至リ城山會ニ列ス。

七月一日 土曜 晴

午前六時半外出。終日重要事項ニ従事。夜ニ入り千駄ヶ谷ヨリ乗車、九時帰宅。

七月二日 日曜 晴

午前來客多シ。

午后二時ヨリ八時迄房子材料調〔トヤ〕。

八十九度。

七月三日 月曜 曇一時少雨

午前六時半ヨリ外出。終日重要事項ニ従事。成績稀ニ見ル程良好。藤沢氏ト山谷マデ愉快ニ同行シ其処ニテ相別レ九時半帰宅。

七月四日 火曜 曇雨

午前千坂中將等來客多シ。

文藝春秋社ヨリ依頼ノ隨筆「妖刀」ヲ起稿シ三時間ニテ全了。

実業の日本社ヨリ五百部ノ追加捺印ニ来ル。

七月五日 水曜 晴

午前十時東郷元帥ヲ訪ヒ夫レヨリ正午回教学校ニ至ル。別紙ノ如シ。午后二時帰宅。

同四十分ヨリ八時迄房子材料調査。

〔新聞記事貼付〕

『七月五日』教祖マホメツトの誕生日に代々木富ヶ谷の東京回教学校では基督教に於ける羅馬法王にも較ぶべきラスマン王朝の正系プリンス・アブドルカリム殿下を迎へ奉り厳肅なる回教徒の儀式を正午より催した。手狭な二階に食卓を並べ、正面にトルコ帽姿の殿下、その左に来賓鎌田栄吉、小川平吉、菊池武夫男、高田豊樹中将、五百木良三、左に小笠原長生子、両角三郎中将、大野豊四中将の諸氏居並び、会場右側は回教徒、左側は一般来賓、各々着席を待つて東京回教学校生徒約二十名愛らしい姿で舞台上に並び『マオドルナヴィ』の合唱並に『コーラン』の読経をはじめた、続いて『君が代』合唱、『ファテハ』合唱、語音の近い日本人と寸分違はぬ発音は来賓一同を驚かせ、团长グルバンガリー氏は見事な日本語にて、米を喰ひ、ドテラを着流し、キロリのはたでアグラをかく我々土耳其民族は日本民族と些の変わりもない、日本に亡命して十三年―温かい大和民族の懷ろに抱かれ朝夕何の不安もなく子弟の教育に力を傾けてゐる我々の団体は、世界に撒布してゐる回教徒二億五千の同胞の間に動かすべからざ□〔空白〕存在となつてゐる、十三年の間に日本精神を出来得る限り我々の二世―子供に植へつけることに努めてゐる、回教徒が日本精神を汲み、日本人が回教徒を理解するなれば、亜細亜の結成は困難なる事業は絶対でない

と大雄弁を揮ひ、続いてアブドルカリム殿下は歓迎の謝辞を述べ、来賓を総代して鎌田栄吉、小笠原長生子交々答辭を述べ、回教徒独特の食卓を開かれ殿下を囲んで四方山の話に花が咲いた。午後三時、プリンス殿下発声で聖寿万歳を三唱及び小川平吉氏の発声で回教徒万歳を

三唱して散会したが、回教徒が日本に亡命して十余年、この日ほど感激に満ちた意義深い教祖誕生記念日を迎へたことはなかつたと言はれてゐる

七月六日 木曜 晴雨

午前六時外出。終日重要事項ニ従事。

夜二入り加藤ト甲州街道ニテ別レ（細雨降り出ス）自動車ニテ帰宅。

七月七日 金曜 晴

午后大雷雨、市中ニテ落雷七ヶ所ニ及ビシガ夕刻快晴。

秀子、午后九時二十分東京駅着汽車ニテ帰京。兎女ト共ニ之ヲ迎フ。

七月八日 土曜 晴雨

午前十一時ヨリ午后五時迄房子材料調査。

夕刻驟雨アリ。

七月九日 日曜 驟雨

午前十時半田中光顕伯ノ招キニ応シ、且東郷元帥代理トシテ多摩聖蹟

ニ参拜ノ後、光顕伯、小山法将〔相カ〕等ト共ニ満洲国家現代代表十名

ニ会シ、午后三時千坂中将ト共ニ帰宅。

〔多摩聖蹟記念館完成記念式挙行 九日東京府下蓮光寺で〕の記事貼付〕

畏くも明治天皇御尊像を奉安す多摩聖蹟記念館は今漸く付属設備も完成したので多摩聖蹟記念会では此の光榮ある完成を意義あらしむべく九日□記念館所在地東京府下南多摩郡多摩村大字蓮光寺に東郷元帥、

荒木陸相、大角海相、小笠原長生^(マ)伯を始め朝野名士多数が参拝し風光明媚の聖地に、明治大帝を偲び奉る事となつた当日は記念会長田中光顯伯より聖蹟記念館建設の由来に就き説明あり、尚日本精神研究の爲め目下入京中の満州国家裡教代表数名も参拝する筈である

七月十日 月曜 曇

邦芳王御四十日祭。

午后三時東郷元帥ヲ訪ヒ、昨日ノ多摩聖蹟ノ件報告並ニ対露ニ付意見交換。

午后四時會館ニ至リ特別會議ニ列シ夕刻帰宅。

夜兎等ト遊戯ヲナス。

七月十一日 火曜 晴

午后二時ヨリ七時半マデ房子材料調査。

本日ノ新聞ニ生産党ニ関スル不穩ノ記事掲載セラル。

七月十二日 水曜 晴

午前六時二十分外出。終日重要事ニ従事。結果良好、歡喜ニ堪ヘズ。

電車ニテ午後九時十分帰宅。

七月十三日 木曜 晴

午前九時千坂中将来訪。尋テ西田税氏来リ、生産党事件ニ付重大事ヲ報ゼラル。仍テ明日博恭王殿下ニ拝謁ヲ乞ヒ奉リ、午前十時半伺候ノ事トナル。

午后三十余枚ノ揮毫ヲナス。

同五時理髮。(後略)

七月十四日 金曜 晴

午前十時十五分軍令部ニ至リ部長殿下ニ拝謁シ、五十分ニ互リ生産党陰謀事件ニ皇族方ノ御名ヲ利用セル件ニ関シ言上シ又意見ヲ拝聴ス。

午后二時半日比谷公会堂ニテ満洲研究団ノ歓送会ニ列シ、夫レヨリ東郷元帥ヲ訪ヒ殿下ニ言上ト同様ノ件ヲ告ゲ、研究団代表ニ元帥ト共ニ面会シ、夜海軍大臣ノ招待ニ応シ千坂、南郷両將ト共ニ紅葉館ニ至リ九時迄快談ス。

〔東京日日新聞〕七月十五日付朝刊「満洲産業建設研究団 期待を反映して白熱の歓送」の記事貼付

七月十五日 土曜 曇

午后二時ヨリ七時迄房子材料調査。

七月十六日 日曜 曇

午前十数葉ノ揮毫ヲナス。

午后藤堂高寛夫妻及兒女等来ル。夕食ヲ共ニス。

七月一七日 月曜 晴

午前九時半千坂、南郷両将来訪。重要事件ヲ協議ス。南郷少將ハ明日大角大臣ヲ訪問ノ事ニ決ス。

午后二時海軍協會守武(幾雄カ、海軍予備役)中佐来リ、高嶋屋^(マ)海軍展覽会ヘノ出品ヲ持帰ル。

午后四時小笠原伯来訪。生産党ノ顛末ヲ訊ネラレ、此方ヨリハ海軍予

算ニ尽力サレンコトヲ囑ス。

七月十八日 火曜 曇晴

午前揮毫。

午後一時ヨリ七時半マテ房子材料調査。

強風。

温度九十六度。

七月十九日 水曜 晴強風

午前八時次郎長会ノ加藤氏来訪。鈴木氏ノ件ヲ告ゲ意見ヲ訊カル。

同九時加藤大将来訪。軍令部条例改正ノ件ヲ告ゲラル、及人事問題付

一時間余意見交換ス。

同十時実川時次郎氏、トルコプリンス及回教ニ関スル件ニ付意見ヲ訊

ネラル。

午後五時千坂中将以下有志五名ト共ニ玉川畔〔空白〕亭ニ遊ビ晚餐ヲ

共ニシ、午後十一時三十五分帰宅。

七月二十日 木曜 晴

故伏見宮邦芳王御五十日祭御執行。

七月二十一日 金曜 晴

午後一時半ヨリ七時半迄房子材料調査。

夜暑クテ眠ル能ハズ。

暑氣九十二度。

七月二十二日 土曜 晴驟雨

午前六時外出。終日重要事項ニ従事。

劇シキ雷鳴アリ、驟雨ヲ伴フ。

夜山谷マデ深澤氏ト同道、九時帰宅。

本日丑ノ日、鰻ノカバヤキヲ喰フ。

七月二十三日 日曜 晴

午前労働新聞記者来リ予ノ談話ヲ筆記ス。「講談」二百二十四号ニ予

ノ「海賊代將軍」掲載サル。

夜南郷少将来訪。

夜ニ入り勝代来リ揮毫ヲ望ム。

暑氣九十四度（三十四度八分）。

七月二十四日 月曜 晴

午後一時半ヨリ七時半迄房子材料調査。

強風。

九十五度余。

七月二十五日 火曜 晴

午前八時次郎長会ノ加藤氏来訪。鈴木氏ノ件ヲ告ゲ意見ヲ訊ネラル。

同九時実川時次郎氏、プリンスノ近況及外務省トノ交渉ヲ告ゲラル。

同三十分加藤大将来訪。軍令部条例ノ改正ニ付其ノ顛末ヲ告ゲラル。

予ハ同大将ニ注意スル所アリ。

午後五時玉川畔〔空白〕亭ニ至リ千坂中将以下同志五名ト会シ、晚餐

ヲ共ニシ午後十一時四十分帰宅。

強風。

七月二十六日 水曜 曇細雨

午前数名ノ来客ニ接ス。

実業の日本社野口氏ニ東郷元帥ノ色紙(誠字)ヲ贈ル。

七月二十七日 木曜 雨

午后一時二十分ヨリ七時迄房子材料調査。

正午頃藤堂勝子(武子改名)来リ夕刻辞去。

今朝武藤元帥薨去ノ旨夕刊ニ掲載セラル。惜ムベシ。

七月二十八日 金曜 曇

午前八時山下大佐来訪。続イテ千坂中将来訪。

対米及海軍人事ニ付重要ノ意見ヲ交換ス。

九時三十分故武藤元帥邸ニ至リ弔辞ヲ述ブ。

十時国史大図鑑(吉川弘文館発行)関係者来リ、東郷元帥筆蹟、写真貸与ヲ請ハル。承諾ス。

七月二十九日 土曜 晴

午前九時千坂中将来訪。

同十時実業の日本ノ佐藤氏来リ、故武藤元帥ノ書簡ヲ撮影ス。(中略)

夕刻理髪。

七月三十日 日曜 晴

午后二時ヨリ七時迄房子材料調査。

空前ノ好成绩ヲ挙ゲ予ニ取リテハ從來ニ無キ名文ヲ得タリ。感喜ニ堪ヘズ。

七月三十一日 月曜 晴驟雨

午前五時五十分外出。終日最大重要事ニ従事シ、空前ノ好成绩ヲ得タリ。感喜ニ堪ヘズ。夜ニ入り福澤ト重要事ヲ談話シツ、三屋ニ至リテ相別レ、八時五十分帰宅。

八月一日 火曜 驟雨曇

午前九時千坂中将、南郷少将来訪。重要事項ヲ議ス。午前十時実業の日本ノ橋本氏来訪。同十一時読売ノ永長、日々ノ(空白)氏来訪。五・一五事件、予算等ニ付意見ヲ交換ス。

千坂、南郷両氏ト午餐ヲ共ニス。南郷少将ハ夫レヨリ大臣訪問。

八月二日 水曜 曇

午后一時二十五分ヨリ七時迄房子材料調査。此ノ前二次グ好成绩。

八月三日 木曜

午前十時東大法科講堂ニ於ケル書道講習会ニ清浦(奎吾)会長ニ代リテ出席。開会並ニ賞品授与式ヲ挙行シ、且「書道ニ関シ依仁親王ヲ追憶シ奉ル」トノ題下ニテ一場ノ講話ヲナセリ。

午后一時東久邇宮邸ニ伺候シ御進級ノお祝ヲ、並ニ書道講習会終了ヲ言上ス。

一時四十分帰宅。

三時世田ヶ谷署長保科氏来訪。後援会長タランコトヲ望マレシモ辞退ス。

同四時宇宙社員来り昨日ノ筆記訂正ヲ乞ハル。即座ニ訂正ス。

先般ノ大阪三越ニ於ケル展覽即売会デ予ノ揮毫（半折三行モノ）五十円ニテ売レタリ。

〔東京日日新聞〕八月四日付朝刊「泰東書道院講習受賞者」の記事貼付〕

八月四日 金曜 晴

午前九時千坂中将来訪。

同三十分兼子豎〔海軍退役〕大佐来訪。

午后三時佐々木八十八氏紹介ニテ大阪愛国学徒連盟代表藤田藤一氏及大阪府三島郡島本村々長藤原三右衛門氏外二名来訪。桜井楠公会作興ニ付予ニ講演会ニ出席ヲ乞ハル。仍テ九月十四日カ十一月初旬ナラバ出席スベキ旨ヲ答フ。

午后八時石川中佐来訪。国防ニ関スル重要事項ニ付詳説セラレ、且意見ノ交換ヲナシ十時辞去セラル。

九十二度。

八月五日 土曜 曇

午前九時半ヨリ午后四時迄房子材料調査。大ニ進捗。

午后六時星ヶ岡茶寮ニ至リ千坂、南郷両将ト共ニ先般ノ返礼トシテ宮田、崎山両氏ヲ招待シ晚餐ヲ饗シ九時半帰宅。

九十度五分。

八月六日 日曜 時々驟雨

〔前略〕

午后四時松井久氏来り晚餐ヲ共ニシ十時過マデ快談。

本区八九時ヨリ十時迄空襲演習、燈火ヲ滅ス。

夕刻本田仙太郎氏ヨリ故武藤元帥ニ対スル弔辞ヲ持来ラセ予ニ訂正ヲ乞ハル。直ニ訂正シテ還ス。

庭樹ニ鶯来り啼ク事頻リナリ。芽出度シ。

八月七日 月曜

五一五事件ノ公判ノ人氣沸キ、大シタ評判ナリ。殊ニ三上中尉ノ陳述痛快ヲ極ム。

八月八日 火曜 曇

午前六時外出。終日重要事項ニ従事。成績最良好。山谷ヲ経テ午后九時帰宅。

不在中佐々木清隆氏上京来訪。秀子ト種々家計上ノ相談ヲナス。予ハ明後日面会ノ筈。

慶子ヨリ書面至リ〔中略〕東郷元帥ノ夢ヲ見タガお（ママ）変リハナイカト尋ネ来ル。

八月九日 水曜 曇

午前八時防空演習開始。

午前七時半崎山氏来り鈴木総裁ヘノ予ノ伝言（無任所大臣トシテノ入閣ニ絶対反対）ヲナシ、ニ、決シテ入閣セザル故安心アリタシトノコトナリ。

午前十時徳川公ト会館ニ会ス。同公ヨリ不在中(同公ハ明後日出発、明年二月頃マデ欧米漫遊)会館ノコト、学習院事件ノコトヨロシク頼ムトノ話アリ。帰途丸ビルニ立寄り眼鏡ヲ注文ス。夜ベラントニ出テ演習ヲ視察ス。

八月十日 木曜 曇

午前九時山本英之助氏、続イテ千坂中将来訪。満洲ノ件ニ付要談。

同二十分次郎長会ノ加藤氏来訪。暫時ニシテ辞去。

午前十時佐々木清隆氏来訪。午餐ヲ共ニシ家計ニ付協議シ、其ノ他時局等ニ付午后三時マテ懇談、辞去。之ニ慶子ヘノ書籍及書面(中ニ東郷元帥ヨリ数日前来レル書簡封入)ヲ託ス。本日モ防空演習。

午後十一時石川参謀ヨリ人事ニ関シ電話アリ。

八月十一日 金曜 曇

午前九時半ヨリ午后四時迄房子材料調査。

旧キ衣服ニ着替フ。

八月十二日 土曜 晴

午前九時千坂、南郷兩将来訪。之ト人事行政ニ関スル件ヲ議シ、其ノ結果南郷少将即時大角大臣ヲ訪問ノ事トナリシガ夕刻再度来訪。詳細ニ事ノ顛末及大臣ノ懇談ヲ告ゲラル。仍テ予モ納得ス。

午后四時「富士」記者、実山青果氏ノ使トシテ来リ、東郷元帥伝ノ一節ヲ脚色シタキヲ以テ、予ノ意見ヲ訊キ為面会ヲ希望サル。仍テ来ル十八日面会ヲ約ス。

本日三十余枚ノ揮毫ヲナス。

八月十三日 日曜 晴

午前九時田中檢事来訪。

同十時小笠原伯ノ紹介ニテ島田壽海師来訪。

同三十分三浦一平氏来訪。

宏子、御宿ニ行ク。

八月十四日 月曜

午前九時二十五分上野駅ニ至リ東久邇宮殿下ノ御赴任ヲ奉送ス。十時帰宅。

午後一時半ヨリ七時迄房子材料調査。

〔東久邇第二師団長宮御赴任〕の記事貼付〕

新たに仙台第二師団長に御親補の東久邇中将宮殿下には十四日午前九時廿五分上野駅発仙台行急行に召され单身御赴任の途につかせられた、御見送りの湯浅宮相、荒木陸相、倉富枢府議長、清浦伯爵、床次竹二郎氏、秦憲兵司令官、藤沼警視總監、香坂東京府知事、小笠原長生子爵、南、林、河合、渡辺各大将に調を賜ひ都下各部隊将校代表本郷、下谷、中野、尾久各在郷軍人団五百余名その他多数三番ホームに堵列御見送りのなかを御機嫌うるはしく仙台に向はせられた

八月十五日 火曜 晴

午前九時千坂中将来訪。

同十時国史大図鑑関係者来リ、予ノ所持ノ名士ノ揮毫多数ヲ撮影ス。午后四時半理髮。

八月十六日 水曜 曇

午前五時五十分外出。夜二入ルマデ重要事項ニ従事シ、成績頗ル良好ニシテ効果大ナルヲ認ム。佐藤ト同行、〔空白〕ニテ相別レ九時五十分帰宅。

池田妙子殿待チ居リ十時四十分マデ色々要談。

八月十七日 木曜 曇

午前九時千坂中将来訪。

午后三時ヨリ七時迄房子材料調査。

少々風邪ノ気味ニテ八時臥床。

八月十八日 金曜 晴

少々風邪ノ気味アリ。

午前十時真山青果氏、キング記者二名ト共ニ来訪。東郷元帥伝中ヲ脚色スルコト付キ予ノ意見ヲ訊ネラル。仍チ薩英戦争カ大震災ノ場面ガ可ナルベキ意見ヲ述べ、殊ニ大震災当日ノ元帥邸ノ有様及二七不動御遷座ノ件ヲ詳説ス。青果氏大ニ喜ブ。書籍数冊ヲ貸ス。
午后臥床。

八月十九日 土曜

〔記事なし〕

八月二十日 日曜 晴

午前九時半ヨリ四時迄房子材料調査。

六時鈴木喜三郎氏ノ招待ニ応シ柳光亭ニ至ル。千坂、南郷同席。主人

側ハ鈴木氏ノ他ニ宮田、〔空白〕両氏アリ。国家将来ニ関シ忌憚ナキ意見ノ交換ヲナシ八時半散会。

八月二十一日 月曜 晴

〔省略〕

八月二十二日 火曜 晴

一日休養。

八月二十三日 水曜 晴

〔前略〕

本日九十四度。

八月二十四日 木曜 晴

午前九時半ヨリ四時半迄房子材料調査。

八月二十五日 金曜 晴

横浜沖ニテ観艦式御挙行。孝長、基之、迪怜、宮崎ト共ニ拝観ニ赴ク。
〔後略〕

八月二十六日 土曜 晴

午前九時東郷元帥ヲ訪ヒ近頃ノ色々ノ出来事大要、殊ニ今後政変アラバ諸方面ヨリノ要望ハ元帥ニ集中スベキヲ告ゲ、又信州乃木神社ノ揮毫ヲ乞ヒ（同時ニ予ノ扇面ニモ揮毫ヲ乞ヘリ）、尋デ十一時大阪ヨリ上京ノ小学校選抜生十名ヲ紹介シ正午帰宅。

夜千坂中将ヲ招キ列坐ニテ山下大佐、石川中佐、摺澤〔末沢の誤りか〕少佐ヲ引見シ、五一五公判ニ関スル庄迫来ニ付聴取スル所アリ。千坂中将明日大角大臣ニ面会、忠告スルコトニ決定。大阪放送局ヨリ九月十四日午前十時楠公ニ付放送ヲ乞ヒ来ル。諾ス。

八月二十七日 日曜 晴

〔前略〕

午后一時半ヨリ六時半迄房子材料調査。

八月二十八日 月曜 晴

午前九時千坂中将、西田税氏来訪。内大臣候補ニ博恭王殿下ヲ推戴シ代ルコトニ付予ノ意見ヲ訊ネラル。不同意ナル旨ヲ答フ。

〔楠公と乃木將軍〕起稿。

八月二十九日 火曜 晴

午前六時外出。終日重要事項ニ従事シ、夜ニ入り福沢ト懇談シツ、山谷ニ至リ相別レテ八時半帰宅。

八月三十日 水曜 晴

午前九時四十分ヨリ午后五時迄房子材料調査。

八月三十一日 木曜 晴

午前八時加藤大将来訪。日米戦争ノ際ニ於ケル諸重要事項ニ付打合せヲナシ、又政界将来ニ付意見ヲ交換シ十時辞去。

夕刻勝代来ル。

午后五時半中村吉右エ門、大橋秀花ト同道ニテ来訪。今般演出ノ文覚上人ニ付予ノ意見ヲ訊ネ、又台詞及仕グサノ訂正ヲ乞ヒシユエ、即座ニ台詞ヲ訂正シ又数ヶ所仕グサニ付意見ヲ述ベシニ悉ク之ニ従フコト、ナリ、八時辞去。

九月一日 金曜 晴

午前七時半小笠原伯菩提寺ノ住職来訪。

〔楠公と乃木將軍〕脱稿。

午前十一時五十八分黙禱。

九月二日 土曜 晴

午前九時二十分ヨリ午后四時半マテ房子材料調査。

九月三日 日曜 曇

午前九時ヨリ十一時半マテ千坂中将、南郷少将、薩摩氏（同氏八十時辞去）来訪。五、一五事件公判ニ関シ談話ヲ交ユ。

同十一時半白井中来訪。

午后五時佐々木八十八氏来訪。六時辞去。

午後七時ヨリ九時半マテ園田少将、真崎大佐来訪。人事行政、殿下方ノ御上、其他重要事ニ付談話ヲ交フ。

九月四日 月曜

午前十一時増田侃氏来訪。同十分ケリム王子、暇乞ニ来訪。

九月五日 火曜 晴

午前六時十分外出。一日重要事項ニ従事シ、夜ニ入り山谷マデ友人ト同行シ八時四十分帰宅。

九月六日 水曜 晴

午前十時會館ニテ野村益三子ニ会シ、学習院ニ関スル件及東郷元帥ニ揮毫依頼ヲ受ク。

同十一時理事會ヲ開キ正午散會、帰宅。

午后四時半千坂中將來訪。

同五時嘉津子（武子改名）來ル。

同七時松井氏父子來訪。（中略）嘉津子以下孝長、基之等ヲ引合ス。

九月七日 木曜 晴

午前九時十五分ヨリ午后四時迄房子材料調査。

不愉快ノ事アリ。

九月八日 金曜 曇晴

頭山翁ノ紹介ニテ〔空白〕氏兩人來リ日米戦争ニ付意見ヲ述ベラル。

故邦芳王御百日祭御舉行委員長相勤ム。

夕刻元帥副官山崎（ママ、山路一行の誤り、海軍）大尉來リ雲龍會

〔東郷の副官経験者から成る親睦會〕ニ付打合セヲナス（奥〔信一、海軍省人事局第二課長〕大佐同道）。

夜千坂中將、南郷少將來訪。斎藤、小林〔躋造〕會見ニ付重要協議ヲナス。

九月九日 土曜 晴

午前九時千坂中將、續イテ西田稅氏來訪。西田氏ヨリ清浦伯及秦（真次）憲兵司令官、各牧野（伸顯）内府ニ辭職ヲ勸告シタル件及荒木陸

相敢然決意スル所アル旨ヲ告ゲラル。兩氏ト途中マデ同行ノ上、十時東郷元帥ヲ訪ヒ、首相、小林司令長官ヲ招キ補充計画ニ付協議スル所

アリタル旨ヲ告ゲ、其ノ不都合ヲ述ベタル所、元帥モ全然同感ナル旨ヲ答ヘラル。又五・一五事件判決ニ付元帥ノ意見ヲ聴キ、其ノ他數項

ノ重要事項ヲ告ゲ正午帰宅。

夕刻実業の日本社橋本氏ニ面會。諸會史及□□起稿ノ件ヲ議ス。同時ニ同氏ヨリ「海賊大將軍」起稿ヲ乞ハル。

九月十日 日曜

午前九時二十分ヨリ午后五時迄房子材料調査。

九月十一日 月曜

〔記事なし〕

九月十二日 火曜 晴

午前六時外出。終日重要事項ニ従事。夜ニ入り電車ニテ八時帰宅。

九月十三日 水曜 晴

午前九時「燕」ニテ出發（秀子見送ル）。午后二時半名古屋ニ下車。

山本（英忠カ、海軍後備役）軍医少將以下多數ノ出迎ヲ受ケ、師團司令部、市庁、府庁ヲ訪問ノ後〔空白〕方ニ休息。晚餐ノ後公會堂ニ至

リ「乃木將軍ニ就テ」ノ題下ニ一時間半ニ互リ講演ヲナス。聴取三千

五百人、頗ル盛会ナリキ。了リテ市長ノ饗応ヲ受ク。
午后十一時大阪行ノ汽車ニ投乗。

九月十四日 木曜 晴

午前四時四十九分大阪ニ下車。佐々木八十八氏、学徒連盟団代表等多
數ノ出迎ヲ受ケ自由亭ニ休息。

午前十時半ヨリ三十分間「楠公ト乃木將軍」ノ放送ヲナシ、再ビ自由
亭ニ帰り數十葉ノ揮毫ヲナシ、午后三時ヨリ「空白」講堂ニ至リ「楠
公ト東郷元帥」ノ題下ニ一時間半ノ講演ヲナス。聴衆千五百人、頗ル
盛会ナリキ。了リテ八十八氏ト共ニ住吉ニ至リ久々ニテ清隆、慶子、
弘純、幹子ニ面会。尽キヌ物語リニ夜ヲ更シ慶子、弘純ト共ニ日本坐
敷寝ヌ。幹子ハ発熱、氣難ムツカシカリキ。
慶子、殆トツキキリニテ世話ヲナシ呉ル、嬉シカリキ。

九月十五日 金曜 晴

終日休息。夕刻ヨリ數十葉ノ揮毫ヲナス。又太田真典師等數名ノ訪問
客アリ。

弘純ヨリナツキ愛ラシサ限リナシ。
復又話ニ夜ヲ深ス。本夜ハ清隆ト共ニ日本坐敷ニ寝ル。
本日モ慶子世話ヲナシ呉ル。益々満足。

九月十六日 土曜 晴

午后一時神戸発ノ「燕」ニテ帰京ノ都ニ就ク。
慶子、迪恰見送り呉レ八十八氏ハ京都マデ見送ラル。
大阪駅ニハ清隆始メ多數ノ見送人アリ。

午后九時二十五分東京駅着、秀子及ビ兒女等出迎ハル。

九月十七日 日曜

午后一時ヨリ六時迄房子材料調査。
不在中五、一五事件ノ公判、山本〔孝治〕檢察官ノ論告ヨリ紛糾シ、
夜ニ入り横鎮ノ末沢〔慶政〕參謀來訪、之ニ策ヲ授ク。

九月十八日 月曜 晴

午前八時半加藤大將ヲ訪ヒ不在中ノフンキフ顛末ヲ聴キ、尋デ東郷元
帥ヲ訪ヒ土産ヲ呈シ五、一五事件ニ付一時間ニ互リテ意見ヲ陳述シ正
午帰宅。
午后五時ヨリ八時迄千坂中將、南郷少將ト意見ノ交換ヲナス。

九月十九日 火曜 晴

午前町田〔経宇、後備役〕陸軍大將、尋イデ井上清純男來訪。五一五
事件ニ付意見ヲ訊ネラル。
午后三時大角大臣ト官舎ニ会シ五、一五事件フンキフ善後策ニ付協議
シ、了リテ午后四時半東郷元帥ヲ訪ヒ大臣トノ会見顛末ヲ告ゲ夕刻帰
宅。

九月二十日 水曜 雨

午前六時外出。終日重要事項ニ従事シ、雨天ニモ拘ラズ〔空白〕マデ
重要人物ト同行シ夜八時帰宅。

九月二十一日 木曜 雨

午前八時半御召ニヨリ伏見宮邸ニ伺候シ博恭王殿下ニ拝謁。本日午后開催セラル、軍事參議官會議ノ議題タル軍令部条例改正ニ付委曲ノ御話ヲ拝聴シタル後御伝言ヲ齎シテ東郷元帥ヲ訪ヒ（元帥ハ所勞ニテ會議ニ欠席）、其ノお答ヲ持シテ軍令部ニ至リ再度殿下ニ拝謁シテ之ヲ言上シ正午頃帰宅。

夕刻ヨリ千坂中将、南郷少将ヲ招キ共ニ石川參謀ヨリ艦隊ノ青年將校ノ近況ヲ聴キ、予ハ電話ヲ以テ大臣ト打合セ明後日夜三人ニテ大臣ヲ私邸ニ訪問スル事ニ決定シ八時半散会。

九月二十二日 金曜 晴

午前九時千坂中将及山岡氏來訪。五、一五事件ニ付意見ヲ交換ス。山岡氏八十時辞去。

十時加藤大將來訪。一昨日ヨリノ狀況ヲ報告セラレ十一時十五分辞去。午后四時半ヨリ秀子、佳津子、房子ト共ニ東劇ヲ見物ス（吉右エ門（マ）ノ文覚、菊五郎ノ高杯）。久々にて面白かりき〔平仮名ママ〕。十一時帰宅。

九月二十三日 土曜 晴

午前九時二十分ヨリ午后三時マテ房子材料調査。

午后五時半山下大佐來訪（千坂中将ト共ニ面會）。関西ニ於ケル陸軍青壯年將校ノ潜行的活躍ト情況ノ切迫セルヲ告ゲラレ、是非トモ至急小林章三郎少将ヲ次官トスルノ外、時局ノ急迫ヲ緩和スルノ方法ナキヲ告ゲラル。仍テ今夜大臣ニ面會ノ節極力之ヲ主張スルヲ約ス。

同七時大角大臣ヲ私邸ニ訪ヒ南郷少将、千坂中将ト共ニ陸海軍青壯年將校ノ不穩ノ情況切迫セルヲ告ケ種々協議ノ結果、兎毛角モ小林少将

ヲ海軍省兼軍令部出仕トナスコト、明日大臣ガ直接山下大佐ニ會スルコト、五、一五事件被告ヲ有期ニスルコト等ヲ決定シ九時辞去。

九月二十四日 日曜 晴

〔前略〕

午后五時名村（壬午郎カ、長生の弟）家ノ招待ニ応シテ同家ニ至リ、清浦伯、林権助男等ト共ニ丁重ナル晚餐ノ饗応ヲ受ケ九時帰宅。

九月二十五日 月曜

午前九時千坂中將來訪。尋テ訪客多ク九名ニ及ブ。

就中神保權大僧正ノ來訪ハ田中智学氏僧籍ニ復歸スルノ問題ニシテ、予ノ意見ヲ徵セラレタルヲ以テ断行ヲ力説ス。

九月二十六日 火曜 晴

早朝軍令部長官殿下ノ御召ニヨリ午前八時半宮邸ニ伺候、直ニ拝謁。

加藤大將、艦隊司令長官就任可否ノ件、小林ノ件等ニ付御下問ニ奉答、且陸海軍青年將校ノ近況ヲ言上シ、九時半御前ヲ退出、帰宅。

十時五分ヨリ午后四時迄房子材料調査。

同五時華族會館ニ至リ雲龍會ニ列ス。

會スルモノ大角、谷口兩大將以下十五名。

同十五分東郷元帥臨席、記念撮影ノ後、日本料理ノ晚餐ヲ共ニシ、元帥モ大ニ満足ノ体ニテ八時辞去セラル。其ノ後ニテ、第一、明年ハ元帥米寿ニ達セラル、ヲ以テ記念品ヲ贈呈スルコト、第二、明年ヨリ年一、二回元帥ノ出席如何ニ拘ラズ開會スルコトノ二条ヲ決シ八時四十分散會。

九月二十七日 水曜

軍令部条例改正昨日發布、本日ノ官報ニテ公示セラル。
風邪ノ気味ニテ夜腰湯ヲナシ八時臥床。

九月二十八日 木曜 雨曇

午前六時五分外出。終日重要事ニ従事。

新調ノモノヲ用ユ。

夜福田ト途中マデ同行、電車ニテ八時帰宅。

九月二十九日 金曜 曇

午前八時半加藤大将来訪。折節薩摩氏ヨリ安田〔鍊之助、陸軍予備
〔役〕中佐等ニ関スル公判ニ付重大事件ヲ報シ来ル。大将ト共ニ将来ニ
於ケル海軍ノ覚悟ヲ協ル。

同十時吉右工門氏代理トシテ大橋秀花氏来リ、箱書及題目ノ揮毫ヲ乞
ハル。即時書キ与フ。

午后一時半淀橋戸塚ナル名村家別邸ニ至リ、東郷元帥ヨリ寄贈ノ月桂
樹ヲ同元帥代理トシテ手植シ三時帰宅。

四時小笠原伯来訪。政界前途ニ就意見ヲ交換ス。同伯ノ言ニ依レバ、
政変ニ当リ西園寺公ガ東郷元帥ヲ訪ハントスルノハ実ハ長生等ノ意見
ヲ探ル為メナリト云フ。

九月三十日 土曜 曇晴

午前「日蓮聖人ノ大予言」起稿。

午後二時ヨリ七時半マテ房子材料調査。

同八時石川中佐、〔空白〕少佐来訪、十時辞去。

十月一日 日曜

午前〔以下、文なし〕

〔至誠殿落成祝祭式挙行〕の記事貼付

国民一般の思想善導の修養道場となす目的のもとに清浦圭吾伯、小笠
原長生子、佐藤鉄太郎中将を顧問とし、故検事総長貴族院議員名村泰
蔵氏の淀橋区戸塚町小滝橋畔の別邸内に建築中であつた至誠殿は此程
完成し、一日午前十一時より神武天皇御尊像鎮座祝祭及び落成式を挙
行、清浦圭吾伯、荒木陸相、林権助男、松井慶四郎男、倉富枢府議長、
小笠原長生子、元田枢密顧問官、佐藤鉄太郎中将、頭山満翁、徳富蘇
峰氏、鎌田栄吉氏等朝野の名士百余名出席、午後三時盛儀のうちに意
義深き式を閉ぢた〔写真〔略〕は参列の諸名士〕

十月二日 月曜 晴

午前九時府中警察署ニ至リ講演ヲナシ午后帰宅。

午後六時千坂、南郷両氏ト共ニ床次竹次郎氏ノ招待ニ応シ芝山内南側
庵ニ至リ、晚餐ノ饗ヲ受ケケ時局ニ付意見ノ交換ヲナス。

十月三日 火曜 晴

午前九時半ヨリ午后四時マテ房子材料調査。

不愉快ノ事アリ。

寺島〔健、海軍〕中将、練習艦隊司令官タルコト十五日ニテ辞職、新
聞紙ヤカマシク云フ。

十月四日 水曜 晴

午前六時外出。終日重要事項ニ従事。結果面白カラザリシモ、終り頃

ヨリ好転、皎々タル明月ヲ浴ビツ、愉快ニ帰宅。
本日秀子、京都ニ向ケ出發。

十月五日 木曜 晴

午前十時參内拜謁。

十時三十分東郷元帥ヲ訪ヒ寺島中将転任ノ事情、其ノ他ニ付諮問ニ答
フ。

正午水交社ニ至リ高松宮妃殿下ヨリ午餐ヲ賜リ、了リテ貴婦人及宮家
関係ノ人々ニ故威仁親王ノ御逸事ヲ講ズ。

二時帰宅。多数ノ面会人ニ接ス。

夜三新聞社員来リ海軍ノ内情及大臣ノ辞職説ニ付訊ネラル。大臣ノ辞
職ハ絶対ニアラザル旨ヲ答フ。

十月六日 金曜 晴

午前九時半ヨリ午后四時マデ房子材料調査。

十月七日 土曜 曇

明治天皇、会館行幸ノ記念日ナルヲ以テ徳川館長ニ代リ式ヲ挙ゲ。

午后一時半帰宅。

同二時ヨリ三時迄北一輝氏來訪。近來復又不純分子ノ暗躍アルヤノ感
アル旨ヲ告ゲラル。誠ニ国家ノ為メ憂慮ニ堪ヘズ。午后四時半佳津子
ヲ伴ヒ松竹ヨリノ依頼ニヨリ帝劇ノ二條城ノ加藤劇ヲ見物シ、吉右エ
門ニ注意ヲ与ヘ六時半帰宅。

十月八日 日曜 雨

午前六時外出。終日重要事項ニ従事シ、夜ニ入り雨中ヲ新町ヨリ自動
車ニテ八時帰宅。

「二條城ノ清正ヲ觀テ吉右エ門丈ニ寄ス」起稿。

十月九日 月曜 曇少雨

午前九時崎山氏來訪。

午后三時千坂中将ト共ニ玉川ニ南郷少將ヲ訪ヒ、六時ヨリ翠光亭ニ至
リ小酌、十時帰宅。

十月十日 火曜 晴

午前九時二十分ヨリ午后四時半マデ房子材料調査。

十月十一日 水曜 曇

午前八時島田(空白)師來訪。之ヲ堀内中将ニ紹介。

同九時千坂中将、実川時次郎氏來訪。海軍大臣ニ忠告ノ意見ヲ交
換。猶実川氏ヲ南郷少將ニ紹介ス。

十一時実業の日本社(マ)の橋本文吉氏來訪。

午后一時警視庁ノ福崎高等掛來訪。政界ノ近況ヲ訊カル。

夜松井久氏來訪。

風邪ノ気味ニテ腰湯ヲナス。又數回吸入ス。

十月十二日 木曜

午后六時放送局ニ至リ同廿五分ヨリ三十分間「日蓮聖人ノ大予言」ヲ
放送。大ニ反響アリ、身延其ノ他諸方面ヨリ感謝状至ル。

〔趣味講座 日本が無ければ世界は意義なし 日蓮聖人の大予言〕の

記事貼付)

「それ国は法に依つて昌へ、法は人に因つて貴し」と大声疾呼して三十年間、七字の題目を真向にふりかざし、立正安国を志た日蓮聖人程、国家的色彩の濃厚な宗教家は他に類例を見ないのである、然して其觀念の基礎をなしてゐるものは法華經に対する熱烈な信仰であつて、聖人の眼から見ると日本国は法華經、即ち真理の国家化したものであるし、法華經は日本国の經文化したもので此の両者は二にして不二なる關係にある、之を法国冥合と云ふとの主張なのである、仍て私は聖人が「日本は法華經の国なり」と云はれたことを、今日の大予言と信ずるゆゑそれを法華經中の勸持品二十行の偈（法華經を行ずるもの、当然受くべき迫害の情況を述べたもの）にあてはめて、正しく日本国は法華經即ち真理（若くは真道）現顕の国家であることを証拠だて、見たいと思ふのである、実にそれは不思議な程、今日の我對外關係か經文に符合してゐるので、即ち經文の示す所は、正義を守れば孤立に陥るが結局大迫害を撃退して、我主張が勝を制するといふのである、又聖人は常に「世界とは日本国なり」とも云ふてをる。此の意は日本を以て世界の代表国とみなしてゐるので、若日本が無かつたら、世界の存在は畢竟無意味であるとの大抱負なのである

十月十三日 金曜 雨

午前九時半ヨリ午后四時迄房子材料調査。

十月十四日 土曜 雨

午前六時十分外出。終日重要事項ニ従事。下駄ヲ替へ電車ニテ夜八時帰宅。

十月十五日 日曜 晴

午前九時千坂中将、南郷少将来訪。同少将、鈴木氏訪問ヨリ来ル。廿一日予ノ主催ノ下ニ頭山翁以下有志十数名ヲ招待シ、南郷少将ノ意見ヲ聴取スルコトニ決ス。

午后一時東郷元帥ヲ訪ヒ色数四葉ニ揮毫ヲ乞ヒ、又若槻男ノロンドン条約ニ関スル意見発表ニ関スル世評ヲ告グ。

帰途三越ニ寄り買物ヲナス。

夜加藤大将来訪。二時間ニ互リ種々重要打合セラナス。

十月十六日 月曜 雨

午前十時ヨリ午后四時半マデ房子材料調査。

十月十七日 火曜 晴

午前九時千坂中将、南郷少将、続イテ薩摩氏来リ、若槻男ノ演舌ニ対スル海軍ノ態度ニ付意見ヲ交換ス。次テ池田長康男モ来リ同様意見ヲ闘シ、其ノ結果予ハ直接大角大臣ニ電話ニテ勧告スル所アリ。此ノ間佐々木夫人来訪。

午后一時畑憲兵司令官ヲ東郷元帥ニ紹介シ、帰途伊勢丹ニテ買物ヲナス。

同四時鍋島精次郎氏来訪。

夜木下氏来訪。次イデ報知、読売両社政治部記者来訪。補充計画及保留財源ニ付訊カル、所アリ、懇ニ之ヲ誨ユ。

十月十八日 水曜 雨

午前十時佳津子ヲ伴ヒ三浦家ニ佐々木夫人ヲ訪ヒ十一時過キ帰宅。

正午中村吉右エ門氏、吉田紘二郎氏同道ニテ来訪。二時過キマデ愉快ニ文芸談ヲナス。殊ニ予ハ「蔚山ニ於ケル清正」及び伏見大地震ノ際ニ於ケル秀吉、家康ノ関係ヲ話シ、ニ、吉田氏大ニ共鳴シ伏見ノ方ヲ先ニ脚色スルコトニ決ス。
午后三時ヨリ三十余枚ノ揮毫ヲナス。
夜松井久氏来訪。

十月十九日 木曜 雨

午前六時十五分外出。終日重要事項ニ付会合。愉快ニ彼我共ニ兩事項ヲ決定シ、夜ニ入り自動車ニテ七時半帰宅。
数葉ノ揮毫ヲナス。
北野元峰師（九十二才）、今朝還化ノ報アリ。

十月二十日 金曜 豪雨

午前九時海軍省ノ日比野〔正治、海軍省出仕兼軍事普及部委員長、海軍〕少将、大臣ノ命ニテ来訪。民政党訪問ノ顛末ヲ話サレ了解ヲ求めラル。千坂中将モ同席ニテ今後ノ注意ヲ与フ。
十一時ヨリ数十葉ノ揮毫ヲナス。
午后三時長谷寺ニ至リ北野元峰師ノ還化ヲ弔ス。
午后四時かつ子、宏子、房〔子〕ヲ伴ヒ東劇見物。吉右エ門ノ清正、何カラ何マデ予ノ指揮通り改メ益々結構。貴賓室ニテ面会、初メテ房子ヲ紹介ス。
帰途房子ヲ送り十時十分帰宅。

十月二十一日 土曜 晴雨

午前九時玉田氏外一名来訪。

午后一時ヨリ三時迄真崎大佐来訪。重要協議ヲナス。
午后五時ヨリ予ノ名前ニテ頭山翁以下知友十七名ヲ晚翠軒ニ招キ、南郷少将ノ抱懐スル意見ヲ聴ク。

〔我回国体と政党政治を聴く会 きのふ開く〕の記事貼付〕

廿一日午後五時から虎の門晚翠軒に於て小笠原長生子の発起で日頃国士としての立場に於て国務に尽瘁してゐる南郷次郎氏を招き同氏が抱懐する「我が国体と政党政治」論を聴く会を催した。出席者は宮田光雄、頭山満、池田長康男、伊江朝助男、有馬大将、今泉定介、小谷文濟、実川時次郎、入江種矩、井上清純男、崎山武夫、薩摩雄次、田中齊の諸氏で時節柄非常に注目される会合で（以下切抜が途切れてゐる）

十月二十二日 日曜 晴

午前九時十五分東郷元帥ヲ訪ヒ重要報告ヲナシ、又畑憲兵司令官ノ談話ノ情況ヲ聴ク。
同十時ヨリ東郷会員二百余名来訪。
十一時過辭去。
午后一時十分ヨリ七時迄房子材料調査。

十月二十三日 月曜 曇雨

午前九時千坂中将来訪。
同十一時会館理事会ニ列ス。午后零時四十分帰宅。
同一時半ヨリ十数葉ノ揮毫ヲナス。
夜八時半臥床。

十月二十四日 火曜 晴

午前六時二十分外出。終日重要事ニ従事。

夜八時半帰宅（前後五ヶ所ヲ歴訪、疲労ヲ覚エタリ）。

十月二十五日 水曜 晴

午后二時半勝代夫妻来訪。

同三時半報知新聞記者来訪。

同七時三新聞記者来訪。政界ノ近況ニ付予ノ意見ヲ訊ネラル。

十月二十六日 木曜 晴雨

午后二時ヨリ七時マデ房子材料調査。

同九時二十分児女及かつ子、松井久氏ト共ニ東京駅ニ至リ秀子ノ京都ヨリノ帰宅ヲ迎フ。

夕刻ヨリ驟雨アリ、雷鳴ヲ伴フ。一時ヤ、劇シカリキ。

十月二十七日 金曜 晴

午前九時薩摩雄次氏、重大報告ヲ齎シ来ル。

同十一時崎山氏来訪。近日中鈴木喜三郎氏同道ニテ来訪ノ旨ヲ語ラル。

午后二時婦人倶楽部記者来訪。予ノ談話ヲ筆記ス。

同三時主婦の友記者来訪。予ガ所持ノ東郷元帥揮毫ノ撮影、承諾ヲ乞ハル。

同四時聯合通信社長牧氏来訪。政界ノ近況、日蓮主義等ニ付予ノ意見ヲ訊ネラル。

同五時知法恩国会ノ理事和賀氏外一名来訪。十一月三十日日比谷公会堂ニ於ケル講演会ニ出席ヲ乞ハル。条件ヲ付シ承諾。

「ロンドン」条約締結当時ニ於ケル日誌抜萃ニ着手。

十月二十八日 土曜 晴

庭前鶯啼クコト頻ナリ。

十月二十九日 日曜 晴雨

午前六時半外出。終日重要事項ニ従事シ、夜八時自動車ニテ帰宅。

十月三十日 月曜 雨

午前九時千坂中将来訪。

正午理髪。次デ東郷元帥ノ書ヲ調ブ。

午后三時会馆特別委員会ニ出席。

同五時晚翠軒ニ至リ泰東書道院役員会ニ列シ八時帰宅。

十月三十一日 火曜

午後一時五十分ヨリ七時迄房子材料調査。

十一月一日 水曜

午前十時

元土耳其回教法王顧問

元全露国回教管長

アブドル・ラシウド

イ ブラヒム（八十五歳）

クルバンガリー氏ト同道ニテ来訪。新疆ニ於ケル回教徒ノ独立運動ニ関スル真相ヲ話サル。即チ真ノ指導者ハ印度人某ナルモ絶対ニ秘密ニ

ナシ居リ、表面ノ指揮者ハ「カンガール・サマスウデン」ト「ホウタ
ン・サビツド」ナルトルコ人トナリ居ルコト、ケマルパシヤヨリ自分
ハ事アラバ日本ノ弟トナルコトノ伝言等ヲ話サル。仍テ余ハ種々突込
ンダル質問ヲナシ、一時間余ニ至レリ。蓋シ彼ヲ利用スルコトハ全世
界ノ回教徒ヲ利用スル前提ナルヲ思ヒ、幸ニ彼モ予ヲ信用セル如クナ
ルヲ以テ之ヲ善用スルノ覚悟ナリ。

午后主婦の友社員来リテ東郷元帥ノ書ヲ写真ニトル。

十一月二日 木曜 晴

午前真山青果^(モリ)シ来訪。数時間ニ互リ東郷元帥ニ関シ訊ネラル。

〔中略〕

浅香^(アサカ)宮妃〔允子内親王〕殿下御危篤ニ付午后二時半同宮邸ニ伺候シ御
見舞申上グ。

三時東郷元帥ヲ訪ヒ重要報告ヲナス。同元帥ハ咽吸ヲ痛メラレ絶対ニ
面会ヲ謝絶シ居ラル。

四時上野精養軒ニ至リ関直彦氏喜寿ノ祝賀会ニ列シ、主会者清野一郎
氏ノ指名ニヨリ、テーブルスピーチヲナシ七時帰宅。

十一月三日 金曜 曇

午前一時十五分浅香^(アサカ)宮妃殿下薨去ニ付御祝宴ハ取止トナル。

午后一時五十分ヨリ七時迄房子材料調査。

十一月四日 土曜 晴

午前六時半外出。終日重要事項ニ従ヒ、夜ニ入り甲州街道ヨリ自動車
ニテ帰宅。

腹胃ノ工合悪シク屢々休息、服薬セリ。

十一月五日 日曜 晴曇

午前十時ヨリ十一時半迄小笠原伯来訪。西園寺公ノ次ノ組閣者ニ関ス
ル意向等重要談話ヲナシ、荒木陸相、大角海相ニ対シ余ノ尽力ヲ乞ハ
ル。

午后三時半茨木飯島清氏来訪。東郷元帥揮毫ニ関シ余ヨリ意見ヲ述ブ。

午后五時半、三室戸〔敬光〕子、角岡〔知良〕、実川、葛生〔能久〕、

岩田〔愛之助〕、林〔逸郎〕、入江、池田宏諸氏ノ招キニ応シ紅葉館ニ
至ル。客ハ頭山翁ヲ始メ土方博士、今泉定介翁、菊地、井上〔清純〕

両男、五百木氏ト予ニテ丁重ナル晚餐ヲ饗セラレ快談湧カ如ク九時散
会。

十一月六日 月曜 雨

午前九時薩摩雄次氏来訪。各方面ノ近況ヲ告ゲラル。

午前十時警視庁ノ〔空白〕氏来リ昨夜ノ会合其他ニ付余ノ意見ヲ訊ク。

同十一時橋本五雄氏、川合清丸全集ノ件ニ付来訪。

午后一時斎藤喜一氏来訪。

同時大橋秀花氏来訪。

同時米田屋注文ヲ承リニ来ル。

同三時半行政裁判所長清水澄博士来訪。

同四時岡田実少将来訪〔伏見宮家ノ件ニ付〕。

夜薩摩氏再ビ来リ本日佐郷屋留雄氏死刑ノ宣告アリタルニ付、余ニ意
見ヲ訊ネラル、所アリ。

右翼各団隊、明日九ヶ所ニテ演舌会ヲ開ク由ナリ。

十一月七日 火曜 晴曇

午後零時四十分ヨリ六時半マデ房子材料調査。

午後八時薩摩氏、佐郷屋ノ件ニ付来訪。余ノ意見ヲ訊ネラル。

十一月八日 水曜 晴

午前來客多シ。

午後一時鳥山幸龍寺ニテ故丁ノ百ヶ日法要ヲ営ム。

夜理髮。

本日主婦ノ友記者來リ、一月号ノ付録ニスルトテ余ガ秘藏ノ東郷元帥ガ明治天皇ノ御製ヲ謹書サレタル幅ヲ撮影ス。

井上清純男ノ紹介ニテ〔以下、文なし〕

十一月九日 木曜 雨

昨日上原元帥薨去ノ報アリタルヲ以テ、午前大井ノ邸ニ至リ弔意ヲ表ス。

午後キング記者來リ一月号ノ付録ニシタシトテ、余ガ秘藏ノ東郷元帥筆ノ「天与正義神通至誠」ヲ撮影ス。

正午日々号外ニテ五、一五事件ノ海軍被告ノ判決言渡シアリタルヲ知ル。开ハ余ガ大臣ニ希望シタル通りナリシハ喜悅ニ堪ヘズ。

午後二時中央公論社員來リ余ノ秘藏スル東郷元帥書「自強不息」ヲ撮影ス。

同三時野田氏來リ海賊大將軍ニ関スル予ノ談話ヲ聴ク。

同四時半信子〔長生次女〕、節子ノ祝物ヲ持參。

十一月十日 金曜 晴雨

午前六時半外出。終日重要事ニ従事シ雨中電車ニテ九時半帰宅。

夜十一時日々新聞政治部記者田中氏來訪。左ノコトヲ話ス。

一、近來東郷元帥ハ軍人ガ内閣ヲ組織スルノハ不可ナリト云ハレタリトノ噂頻リナルガ信偽如何

一、鈴木政友会総裁、最近兩度元帥ニ面会セリト云フ、信偽如何仍テ予ハ孰レモ全然無根ナル旨ヲ力説ス。

十一月十一日 土曜 雨

午前八時世田ヶ谷署ノ刑事兎玉氏來リ右傾派ノ動キニ付近況ヲ訊ネラル。

同十時本多仙太郎氏來訪。揮毫ヲ乞ハル。

同十一時〔空白〕氏來訪。同時東郷元帥ヨリ電話ニテ來訪ヲ乞ハル。諾ス。

同十二時東郷元帥ヲ病床（一切面会謝絶）ニ訪ヒ、昨夜ノ風説ニ付注意サルベキコト、又誰カ何事ヲ申來ラル、トモ直接返事セラレズ、小笠原ニ訊ネヨト答ヘラレタキ旨ヲ告グ。元帥ヨリハ次ノ内閣ハ

平沼ヲ首相ニ、荒木、鈴木喜三郎兩氏ガ之ヲ援助セバ最モ可ナルベク、然ラザレバ荒木ニテモ宜シカラント

云ハレタリ。

帰途加藤大將ヲ訪ヒ元帥ニ報告セル大意ヲ話シ、又佐郷屋救助ニ関シ打合セヲナス。

午後一時村上貞一氏來訪。其ノ祖先タル海賊大將軍村上義弘ノ事蹟ニ付希望ヲ述べラル。

十一月十二日 日曜 晴

午前九時四十五分豊嶋園ニ於ケル朝香宮妃ノ御喪儀ニ参列シ零時三十分帰宅。

午后三時山本悦三氏、同時ニ山本豊国彦（大日本古神道実行国神州国教義塾私学寮トノ肩書アリ、九州別府市外大平山麓）来訪。

豊国彦氏ハ近況ヲ報告セラレ悦三氏モ亦満洲發展ニ関シ意見ヲ述ベラル。（中略）

非常ニ暖ク近来稀ナル好天気ナリキ。

十一月十三日 月曜 晴曇

午前九時真崎大佐来訪。五、一五事件判決ニツキ謝意ヲ表セラル。又林弁護士ノ依頼タル佐郷屋氏減刑ニ尽力ヲ乞ハル。仍テ既ニ極力之ニ尽力シタル旨ヲ答フ。又同大佐エ（マウ）記シ令兄タル大将（真崎甚三郎）ニ東郷元帥ニ関スルデマニ付注意アリタキ旨ノ伝言ヲ頼ム。

午后一時四十分ヨリ七時迄房子材料調査。

〔中略〕

非常ニ暖カリシ。

十一月十四日 火曜 晴

午前九時千坂中将、南郷少将来訪。来ル十七日鈴木政友会総裁来訪ノ節ノ意見交換ニ付打合セヲナシ、昼食ヲ共ニシ午后一時半辞去。

午前十一時五一五事件ニ付感謝ノ意ヲ表スル為メ左ノ人々来訪セラル

（順序不同）。

第四十七期代表海軍通信学校教官 安川正治少佐

第五十四期代表 井口兼夫大尉

第五十七期級会本部幹事

大杉忠一氏

海軍水雷学校教官
特別弁護ニ当レル

鳥崎利雄少佐
朝田肆六大尉

右同 浅水鉄男中尉

弁護士 林逸郎

秀子、明日出發ノ準備ニ忙殺セラル。

十一月十五日 水曜 曇

午前来客多シ。

午后一時ノ「富士」ニテ秀子、京都ニ出發。之ヲ東京駅ニ送ル。佐藤中将モ同シ汽車ニテ広島ニ出立。

本日發刊ノ文藝春秋ニ子母沢寛氏ノ小笠原壱岐守掲載セラル。

十一月十六日 木曜 雨

午前六時二十分外出。終日重要事ニ従事。

新調ノ衣服着心非常ニ好シ。

友、出京ニ付時間ヲ早メ電車ニテ八時帰宅。

横須賀鎮守府ノ摺沢（末沢の誤りか）参謀、五、一五判決ノ礼ニ来リ、尚ホ佐郷屋ノ件ニ尽力ヲ乞ハレ十時辞去。

十一月十七日 金曜 晴

午前来客多シ。

午后一時鈴木喜三郎氏来訪（崎山氏同行）。千坂中将、南郷少将ト共ニ之ヲ迎へ、三時過マデ時局ニ付意見ヲ交換ス。余等ハ鈴木氏ニ、

政党政派ヲ超越シテ国家ノ為メ赤裸々ニナリテ平沼騏一郎男ト提携シ、一面軍部ト結び以テ真ノ強力内閣ヲ組織シテ、来ルベキ国家ノ重大時

機ニ備フルコト

ヲ極力勸告シタルニ、鈴木氏モ大ニ意動キタル如シ。

同四時浅草寺ノ清水谷師、〔空白〕師ヲ伴ヒ来ル。

同五時半佐々木八十八氏来訪。晚餐ヲ饗シ東郷元帥筆ノ色紙ヲ交付ス。

十一月十八日 土曜 晴

午前来客多、午后三時始メテ朝飯ヲトル。

午前十時半東郷元帥（未ダ咽喉ノ病去ラズ）ヲ訪ヒ、鈴木氏ト面会ノ

顛末ヲ告ゲ、尚元帥ノ面、河合清丸全集及米國産ノ品々ヲ贈ル。

帰途鈴木喜三郎氏方へ昨日ノ答札ニユク。

本日婦人公論記者来リ宏子及予ヲ撮影シ、尚宏子ニ感想文ノ起稿ヲ乞ハル。

十一月十九日 日曜 曇

午前十一時ヨリ午后六時半マデ房子材料調査。

夜松井久氏来リ一泊。

十一月二十日 月曜 晴

午前来客多シ。

午前十一時藤堂佳津子来ル。其ノ話ニヨリ吉右エ門氏方へ電話ス。

午后一時佳津子ヲ先生方へ送り、夫レヨリ八幡方面ヲ散歩シ買物ヲナシ帰宅。

同三時理髪。

十一月二十一日 火曜 晴

午前六時三十分外出。終日重要事ニ従事シタルモ成績不良、帰途モ頗ル不愉快ヲ覚ユ。午后七時帰宅、直ニ電話ニテ軍令部総長宮殿下ニ拝謁ヲ願出デシニ、明日午前十時参殿スベキノ命ヲ拜ス。

同八時読売、報知両政治部記者来訪。予算ニ付予ノ意見ヲ訊キ九時過辞去。

十一月二十二日 水曜 晴

午前九時宏子及松井久氏ノ京都行ヲ東京駅ニ送ル。同所ニテ千坂中将（南郷少将モ来リシガ行違ニテ会セズ）ニ会シ三共ニテ茶ヲ喫シ、夫レヨリ千坂中将ハ加藤大將方へ行き、予ハ伏見宮家ニ伺候シ博恭王殿下ニ拝謁ス。

殿下ハ詳細ニ来年度予算ニ関シ大角大臣ト大藏大臣トノ交渉顛末ヲ御物語リアリタル後、今度ノ予算コソ国家重大中ノ重大事ニテ、若シ海軍ノ希望通りユカネバ自分トシテモ軍令部総長トシテ国防ノ責ヲ完ウスルコト能ハザレバ海相ト共ニ辞職ノ決心ナリト仰セラル。仍テ長生モ隅意ナキ意見ヲ言上シ、特ニ飽マデ強硬ニ突張り内閣倒ル、モ厭ハ^ガル態度ヲ取ラバ、必ズ目的ヲ達スベキ旨ヲ力説申上ゲ、一時間余ニテ御前ヲ辞シ、東郷元帥ヲ訪ヒ殿下ノ思召ヲ伝ヘ忌憚ナキ意見ヲ交換シ、更ニ加藤大將ヲ訪ヒ千坂中将ト鼎座シテ意見ヲ闕セ午后零時半帰宅。

午後一時半ヨリ七時迄房子材料調査。

十一月二十三日 木曜 晴

午前七時南郷少将ト電話ニテ意見ヲ闕シ、予ハ大臣ガ予算削減ノ模様ニヨリテハ殿下ノ御辞職ヲモホノメカスヲ得策トスル旨ヲ告グ。

「燕」ニテ藤堂子夫妻ト共ニ京都ニ向フ。

定刻着。秀子以下兒女等及大島〔陸太郎カ〕子爵夫妻等ノ出迎ヲ受ケ、都ホテルニ投宿。

一同ト晚餐ヲ共ニス。又初メテ今井泰蔵氏ニ面會、立派ナル人格者ト認ム。頗ル満足ス。

十一月二十四日 金曜 雨

午前七時起床。程ナク長英〔長生の次男〕來ル。之二案内セラレテ節子方ヘ至ル。初メテ〔空白〕ヲ見ル。好キ兒ナリ。其ノ將來必ス発達スベキヲ想フ。

午后二時媒酌人大野〔盛郁、京都市長〕氏方ヘ礼ニユク。

同三時、十五、六葉ノ揮毫ヲナス。

同六時帰宿。入湯ノ後九時就寢。

十一月二十五日 土曜 晴

都ホテルニテ信子〔入輿ト共ニ孝子ト改名〕ト今井泰蔵博士トノ結婚式ヲ挙グ。会スルモノ兩家親族知友等ニテ八十余名ナリ。又東郷元帥、田中光顯氏、床次竹次郎氏以下二十余名ヨリ祝電アリ。目出度式ヲ了ル。

十一月二十六日 日曜 雨

午前媒酌人大野氏方ヘ謝意ヲ表シ、夫レヨリ藤堂かつ子ト同道ニテ住吉佐々木家ヘ赴ク〔藤堂〕高寛子モ午后來ル。

夕刻有田音松氏ヲ訪ヒ、夫レヨリ伊藤彦造氏ノ為メ国民會館ニテ一場ノ講演ヲナシ、夜八時半佐々木家ヘ帰ル。

十一月二十七日 月曜 曇

午后零時二十五分神戸發ノ燕ニテ帰京。

十一月二十八日 火曜 晴

午前九時千坂中将、南郷少將、賀久參謀等〔ト〕等來リ、不在中ノ情況及現在ノ關係ヲ述ベラル。

午后二時ヨリ七時迄房子材料調査。

夜ニ入り訪問客多シ。

十一月二十九日 水曜 晴

早朝ヨリ來客ニ接ス。続イテ理髮。

午前十一時加藤大將ヲ訪フ。千坂中将モ席ニアリ、共ニ予算及現内閣

ノ前途ニ就キ意見ヲ交換ス。

午后二時ヨリ重要事ニテ某方面ニ旅行シ一泊。

十一月三十日 木曜 雨

夜ニ入り帰宅。

日々新聞記者來訪。

十二月一日 金曜 雨

早朝軍令部総長宮殿下ヨリお召アリ九時參殿。來年度予算顛末ニツキ詳細御物語アリタル後、

予算主張通り通過セズ大角海相ニシテ辭職ノ場合トナラバ、予モ国防ノ職責ヲ尽ス能ハザルヲ以テ、総長ノ職ヲ退ク決心ナレバ此ノ事ヲ東郷元帥ニ伝ヘクレヨ

トノ御言葉ナリシ故長生ハ其処ニ意見ヲ申上ケズ、直チニ東郷元帥ヲ訪ヒ殿下ノ思召ヲ伝ヘシニ元帥ハ暗然トシテ

殿下在セバコソ海軍ノ統制モ取レ居ルナレ、一旦御退職トナランカ如何ナル軟弱者ガ総長トナランモ知レズ。然ラバ海軍ノ前途誠ニ憂慮ニ堪ヘネバ、殿下ニ於カセラレテハ嚴然御現職ニアラセラレ、国家ノ為メ海軍ノ為メ御尽力アラセラル、コト希望ニ堪ヘズト東郷ガ申シタト言上シ呉レヨ

ト終ニ落涙ニ及ベリ。老元帥ノ胸中ヲ察シ予モ貴ヒ涙シ明日殿下ニ拝謁スベキヲ告ゲテ別ル。帰宅後千坂、南郷及小林順一郎氏等ニ会ス。

十二月二日 土曜 晴

午前九時総長殿下ニ拝謁。東郷元帥ノ希望ヲ詳細ニ言上シタル所、殿下ニオカセラレテモ御眼ヲシバダ、カセラレ暫時御熟考ノ後、東郷元帥カ然程マデ申呉ル、ナラバ初志ヲ翻ヘシ元帥ノ希望ニ副フヤウニ致スベシ

ト御快諾遊バサレ長生モアマリノ嬉シサニ覺エズ落涙ス。

夫レヨリ東郷元帥ヲ訪ヒ殿下ノ^(以下)お言葉ヲ伝ヘシニ、元帥モ感激落涙ス。

仍テ再ビ殿下ニ拝謁シ東郷元帥ノ感激ト感謝シ奉レルヲ言上ス。

帰途丸ビルニテ買物ヲナス。

午后一時千坂中将、南郷少将、崎山氏来訪。

加藤大将ヨリ電話ニテ海軍予算曲リナリニモ通過ノ旨告ラル。

十二月三日 日曜 晴

午前九時世田ヶ谷署長保科久義氏来訪。揮毫ヲ乞ハル。

同十時加藤大将来訪。予算二関シ予ノ尽力ヲ謝サレ種々重要談ヲナシ

十一時辞去。

同正午東郷元帥ヲ訪ヒシニ、今朝予ノ偽手紙ヲ以テ元帥ニ面会ヲ求メシ者アリシモ元帥ニ観破セラレ、ハウ／＼ノ体ニテ逃出シタル由、油断ナラヌ事ナリ。又元帥モ深ク予算ノ通過ヲ悦バレ予ノ労ヲ謝サル。午后一時上野美術館ニ至リ泰東書道院入賞式ニ列シ夕刻帰宅。並木、京都ヨリ帰ル。伊藤彦造氏ヨリ贈物アリ。

十二月四日 月曜 晴

午前六時半外出。終日重要事ニ従事。夜ニ入り明月ヲ踏ンデ帰宅。

本日ノ報知夕刊ニ『現内閣を脅かす無気味な暗流』ト題シテ予ト加藤大将ノ動キガ政界ノ注目ヲ引イテ居ルトノ記事掲載セラレ、加藤大ニ氣ニカケル。

十二月五日 火曜 晴

午前九時愛国婦人会事務総長小原氏来訪。

基金募集ノ件ニ付予ノ意見ヲ訊カル。

午前十時国際連合通信社長〔空白〕氏来訪。政界今後ニ対スル予ノ意見ヲ訊カル。

同十時憲兵総〔以下、文なし〕

午后一時銀座服時計店ニ至リ腕時計〔値百二十二円〕ヲ購フ。

午後六時青山会館ニ至リ忠勇顕彰会記念講演会ニ臨ミ一場ノ講演ヲナシ八時半帰宅。

〔忠勇顕彰会記念祭〕の記事貼付

忠勇顕彰会創立卅年記念祭は五日午後三時半より総裁梨本宮殿下の台臨を仰ぎ荒木陸相、湯浅宮相、山本内相、鳩山文相、町田会頭その他

陸海軍将星百名が列席して赤坂区青山会館別館三階で挙行した。総裁宮殿下には令旨を賜ひ、町田会頭の奉答、各大臣の祝辞があつて式を閉ぢたが、午後六時半から同館行動で記念講演会を開き、小笠原長生子爵、徳富本社々賓の講演があり本社提供トーキー映画『非常時日本』と独唱、舞踊があつて十時半盛會裡に終つた

十二月六日 水曜

午后一時四十分ヨリ七時迄房子材料調査。

十二月七日 木曜 晴

午前六時半外出。終日重要事ニ従事シ、午后八時十五分帰宅。

十二月八日 金曜 晴

午前日々ノ伊藤金次郎氏（加藤大将紹介）、国民ノ〔空白〕氏、警視庁ノ福崎氏、小谷氏等来客多ク、午后佐々木八十八氏等数名来訪。

三時理髪。

同五時半赤坂幸楽ニ至リ米國ニ於ケル大俠者佐々木武行氏歓迎会ニ臨ミ、頭山氏ニ代リ発起人総代トシテ挨拶ヲ述ブ。会スルモノ右傾派ノ猛者百五十名、盛會ヲ極ム。

同九時二十分秀子ノ京都ヨリノ帰京ヲ東京駅ニ迎フ（宏子、松井久氏同道）。

十二月九日 土曜 雨

山本権兵衛伯、昨日薨去ノ報アリ。

午后一時四十分ヨリ七時迄房子材料調査。

十二月十日 日曜 晴

午前十時半上野発ノ汽車ニテ土浦ニ下車。公会堂ニ至リ東郷義会總會ニテ一場ノ講演ヲナス（武富〔邦茂、軍令部出仕兼海軍省出仕、海軍〕大佐同行）。

午后二時五分發汽車ニテ帰京。

夜園田、真崎両少将来訪。

十二月十一日 月曜 晴

午前山本伯邸ヲ訪ヒ弔意ヲ表ス。

美松ニテ買物ヲナス。

同十時半東郷元帥ヲ訪ヒ種々近況ヲ報告ス。

午后新聞社、雜誌記者数名来訪。

十二月十二日 火曜 晴

午前六時半外出。終日重要事ニ従事シ、夜ニ入り電車ニテ帰宅。

松井久氏来リ十一時迄談話ヲナス。

十二月十三日 水曜 晴

午前十時會館ニテ理事会ニ列シ午后一時半帰宅。

数十葉ノ揮毫ヲナス。

日々ノ正木氏外一名、泰東書道院職員三名来訪。

夕刻佐々木武行氏ニ招カレ居タリシモ、風邪ノ為メ断リ腰湯ヲナシ八時就寝。

日々より来年一月一日ノ紙上ニ「米寿を迎へられたる東郷元帥」ヲ掲載スルコトヲ依頼サレ即夜執筆。

十二月十四日 木曜 晴

午前執筆。

午后一時四十分ヨリ七時迄房子材料調査。

十二月十五日 金曜 晴

午后一時青山会館ニ至リ長野県ヨリ依頼ノ幟ヲ揮毫ス。

十二月十六日 土曜 晴雨

午前九時五分上野発汽車ニテ（浅草寺ノ清水谷氏、小石川園城寺市原慶界師同道）茨城県江戸崎町ニ至リ（大宮僧正依頼）〔空白〕寺ニテ「東郷元帥ノ信仰」ノ題下ニ二場ノ講演ヲナス。

聴衆数千人、入場出来ザル多衆ハ道路ニテ予ヲ迎ヘ露店サヘ出テ戸々ハ国旗ヲ揚ガ。

夕刻帰宅。

十二月十七日 日曜 晴

〔前略〕

夕刻千坂中将来リ陸軍部内ニ稍不穩ノ挙アリタル旨ヲ告ゲラル。

十二月十八日 月曜 晴

午前六時半外出。終日重要事ニ従事。夜八時帰宅。

御慶事近キヲ新聞紙報ス。

十二月十九日 火曜 晴

午前十時千坂中将、南郷少将及加藤大将（イ）の紹介者〔空白〕氏来リ昭和

十年、十一年ノ海軍準備ニ付意見ヲ交換ス。

〔中略〕五時薩摩雄次氏来訪。

同六時キング記者来ル。

同三十分東京日々新聞記者来リ御慶事ニ関スル件ヲ訊ク。

同七時三十分東京朝日新聞記者来リ、陛下ガ皇太子ニアラセラレタル御時代ノ御学問ノ御模様ヲ訊ヌ。

十二月二十日 水曜 晴

午后一時十五分ヨリ七時迄房子材料調査。

大円寺服部太元師、夫人同伴ニテ来リ高村光雲氏ト連名ニテ同氏作ノ恵比須大黒ヲ宏子ニ贈ラル。

十二月二十一日 木曜 晴

午前三十余枚ノ揮毫ヲナス。

午后三時半東郷元帥ヲ訪ヒ安保大将辞意ヲ申出デタル件、其ノ他ニ付報告シ、且今後大角海相交迭ノ際ニ於ケル人選ノ諮問ニ関シ意見ヲ述べ。

午后四時半星ヶ岡茶寮ニ至リ千坂、南郷両氏ト共ニ大角海相ニ会シ晚餐ヲ共ニシツ、政界ノ近況及前途ニ関シ意見ヲ交換シ快談数刻、九時過散会。

十二月二十二日 金曜 晴

午后三時大円寺ニ至リ祝物ノ謝意ヲ表シ、夫レヨリ同師同道ニテ高村光雲氏ヲ訪ヒ同シク謝意ヲ表ス。

同五時会館ニ至リ徳川館長代理トシテ評議員会ヲ開キ、了リテ晚餐ヲ

饗ス（銀製ボン／＼入レヲ贈ル）。

十二月二十三日 土曜 晴

午前六時三十九分皇太子殿御降誕アラセラル。洵ニ感激ニ堪ヘズ。

同九時徳川華族会館長代理トシテ参内、拝賀。

午后三時ヨリ七時迄房子材料調査。〔後略〕

十二月二十四日 日曜 晴

午前六時半外出。終日重要事ニ従事。

夜八時帰宅。

不在中伏見宮家ノ御使来リ御紋章付銀製花瓶及金百二十円ヲ賜ハル。

十二月二十五日 月曜 晴

午前十時賜物御礼トシテ伏見宮家ニ伺候。十時半帰宅。

同時尾上設蔵氏、歳末ノ挨拶ニ来ル。

同十一時婦人公論記者来訪。〔中略〕清水谷、大宮両師、講演ノ挨拶

ニ来ラレ賜物アリ。

夕刻日本新聞記〔者〕斎藤氏来訪。

午后四時本化〔空白〕師来リ日将師ノ遺物ヲ受ク。

十二月二十六日 火曜

午后三時七時迄房子材料調査。

十二月二十七日 水曜

正午東郷元帥ヲ訪ヒ米寿ヲ祝フ拙詠ヲ呈シ二時半帰宅。

三時小笠原伯爵来訪。四時迄重要談ヲナス。
夕刻孝長、親友ト会食。

八十八の坂はるのは千歳まで

のほりつ、けむ寿の山

十二月二十八日 木曜

午〔以下、文なし。続いて「奉祝皇太子殿下御誕生 国母准眠観音様 完成す」の記事貼付

国母陛下の御返事を拝してから今年六月より高村光雲翁、山本瑞雲両氏が皇道宣揚の爲め国母求児准眠観音像を製作中の処この程完成し二

十八日午前十時より奉納される大円寺に於て作者並に発起人小笠原長生子、頭山満翁、服部元太氏、中村吉右衛門丈等が集つて下見を行つ

たが何れも春同寺内に於て盛大なる開眼大祈禱を厳修する筈であると〔写真（略）は其の観音様と右より小笠原長生子、頭山満翁、左端高

村光雲翁〕

正午赤坂錦水ニ至リ宮田氏ノ饗応ヲ受ク。

十二月二十九日 金曜

皇太子殿下御命名式

継宮明仁親王

午前十時華族会館長代理トシテ参内。華族一同ノ賀表及献上物ヲ奉呈ス（皇后宮太夫ニ面会、鈴木侍従長ハ御用ノ都合ニテ面会セズ）。夫

レヨリ一旦退出シ十一時半更ニ宮中顧問官トシテ参内。酒饌ヲ賜ル。
午后一時ヨリ五時迄房子材料調査。

十二月三十日 土曜

午前六時半外出。終日重要事ニ従事ス。結果最良好。夜ニ入り雨ヲ侵シテ七時四十分帰宅。

不在中日々新聞社ヨリ謝礼ヲ持参。

十二月三十一日 日曜 晴

午前十一時東郷彪氏来訪。元帥ノ病症ハ喉頭痛ナル旨大学病院ノ増田博士ノ診断ナル由ヲ告ゲラレ、且但シ病氣ノ進ミ遅々タレバ充分加養ナサバ、或ハ一年或ハ二年モタル、ヤモ計ラレズ。但シ診スルニ時間ノ問題ナリト云フ。嗚呼、天ナルカ、命ナルカ、出来得ルナラバマコ仮シ病床ニアラル、トモ、切メテ一年間程ハ存命セラレンコトヲ神カケテ祈ラザルヲ得ズ。